
仮面ライダーカブト 2nd stage

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーカブト 2nd stage

【Nコード】

N7717A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

7年前、突如地球に飛来し、日本・渋谷に落下直撃した巨大隕石通称「シブヤ隕石」によつて周囲地域は壊滅。隕石は人的にも多数の被害を与え、7年後の現在でも渋谷は復興されることも無く封鎖されている。だが、これらの災厄は終わった訳ではなく、すべての始まりにすぎなかった。

プロローグ

7年前、突如地球に飛来し、日本・渋谷に落下直撃した巨大隕石

通称「シブヤ隕石」 によって周囲地域は壊滅。隕石は人的にも多数の被害を与え、7年後の現在でも渋谷は復興されることも無く封鎖されている。だが、これらの災厄は終わった訳ではなく、すべての始まりにすぎなかった。

隕石落下直後より地球人類に擬態し街中を白昼堂々と活動、次々と人を殺しつつ繁殖する正体不明の宇宙生命体の人々に恐怖をもたらしていた。「ワーム」と呼ばれるその生物を滅ぼすため、人類は秘密組織「ZECT」を結成。しかしワームのもつ、目にも留まらぬ高速移動能力「クロックアップ」の前に、ZECTは敗北を重ねる。もはや最後の希望は、完成間もない武装システム「マスキドライダーシステム」のみであった。これを装備し、使いこなせる者が現れれば、ZECTはワームに対抗しうる力を手に入れられるのだ。

プロローグ（後書き）

面白い設定が組上がったので、本小説シリーズのパート2として公開したいと思います。

因みに、「もう一つのお話」とは別です。

カブト

俺は………ワームだ。

俺は今、ある人間を捜している。

何故に捜しているか？

当然、擬態する為だ。

何の為に擬態をするのかだと？

ふつ、一々質問の多い人間やつだな。

そんなに知りたいなら教えてやろう。

「ZECT」の命令だ。

最近になってZECTは、昆虫と人間をバイオテクノロジーで合成し、擬態と言う能力を加えてワームと言う生物を生成した。それが俺だ。

ZECTは、誕生したばかりの俺に、ある男の写真を見せ、

「こいつを見付け、殺して擬態しろ。」

と、俺に命令した。

当然俺は、

「断る。」

と、言つて断つたが、

「これは命令だ。命令に背くのなら、此处で貴様を抹殺する。」
と、脅しを掛けた。

俺は脅しにびびり、仕方なく言う事に従つたのだ。

とは言つたものの、写真の男なんてそう簡単に見つかりはしない。
困つたものだ……。目当ての人間が見つからなければ、俺は確実に殺される。

そう思つた時、写真の男……かみしろ神代 そうじ総司と言うイケメンの男とそ
っくりな人間を発見した。

あいつか？

俺は、地上に降りると、奴の後に降りてソイツに擬態をした。

その瞬間、その男の記憶が流れ込んで来た。
ふっ、この男で間違いないみたいだ。

この男、ZECTが最近開発したマスクドライダーシステムの資格者に選ばれたのか。

待てよ……。マスクドライダーシステムは、我々ワームを倒す為にZECTが作り上げたものだと言った事があるが……。

ZECTは一体何を考えているんだ？

まあ良い。

兎に角、コイツに話し掛けてみよう。

「お前が神代 総司か。」

と、俺は目の前で背を向けている男に声を掛けた。
すると男は、

「そうだが？」

と、言って振り向いた。

その瞬間、男は俺の姿を見て驚いた。

「お、俺が二人！？」

と、男は言う。

俺はニヤリと笑うと、擬態を解いた。

「何だ、ワームか。」

と、男が言った。

「ほお。俺の事を知っているとは。」

「当然だ。」

で、ワームが俺に何の用だ？

まさか、殺すなんて事は考えてないだろうな？」

「ふっ、解ってるじゃねえか。」

俺がそう言つと、

「やめとけやめとけ。」

返り討ちにされるのがオチだ。」

と、目の前の男が言った。

すると、男の下に何かもとが飛んできた。

その何かは、赤色のカブトムシだった。

男は赤いカブトムシを掴むと、それを腰のベルトに装着した。その瞬間、ジヨウントと言う機能でスーツが転送され来て男の身を包み、男はマスクドライダーに変身した。

俺はその姿を見て、

「ほお。カブトか。」

と、呟いた。

「お前は此処で終わりだ。」

カブトはそう言つと、キャストオフをしてライダーフォームになった。

「成る程。スピード勝負つて訳だな。」

俺はそう言つて、クロックアップをすると、カブトに向かって行つた。

それと同時に、カブトもクロックアップをした。

いや、しようとした。

しかし、カブトがサイドバックルを押す前に俺がカブトの腕を掴んだ。

「クロックアップはさせねえぜ。」

俺はそう言い、ベルトに装着されている赤いカブトムシを無理矢理蹴り飛ばして外した。

その瞬間、カブトの変身が解けて男の姿に戻る。

男は元に戻って焦っていた。

「ついでに、このベルトも頂くぜ。」

俺はそう言つて、焦っている男のベルトを奪い取った。

男は更に焦ると、冷や汗を流し始めた。

「トドメだ。」

俺はそう言つて、男の首を握ると、力を入れて骨を砕いた。

骨を砕かれた男は、力が抜けた様に動かなくなり、俺が手を離すとその場に倒れた。

俺は男が死んだのを確認すると、擬態してベルトを腰に巻き、Z E

CTへと戻った。

ZECTに戻った俺は、命令をした三島に会った。

「貴様は。」

と、三島。

俺は三島に、

「あのカブトムシの格好をしたワームを送りつけて来たのはお前だな。」

と、言った。

「あのワームに襲われて生きているとはな。」

三島はそう言っていると、俺に銃を突き付けた。

「ほお。俺を殺すのか。」

そう言っていると、俺はワームに姿を変えた。

「何だ、お前か。どうやら成功したらしいな。」

と言っていると、三島は銃を降ろした。

「俺にカブトの資格者を殺させて何を企んでいる?」

俺がそう聞くと、

「裏切り者の抹殺。」

と、三島が答えた。

「裏切り者?」

「そうだ。」

40年前、我々ZECTは昆虫をベースに人間をバイオテクノロジーで合成した。それがお前達ワームだ。

だが、最近になってそれが暴走を始めた。」

「暴走?」

「その為、ZECTは35年前から研究をしているマスクドライダーシステムを完成させ、資格者に譲渡。

そして、その資格者に暴走をしているワームを抹殺するようお願いした。」

「ほお。」

でもよ、何で俺に資格者を殺させたんだ。」

「資格者としての条件。」

条件？

一体どんな？

三島は、話を続ける。

「資格者としての条件。」

それは、ワームである事。」

「ちょっと待て！

俺が殺した奴は人間だろ？

アイツ、変身したぜ？」

「それが何か？」

「何かって、おい。」

「確かに、人間もその気になれば変身出来る。

しかし、変身を繰り返す度に寿命が縮んでいくのだ。」

寿命が縮む？

「兎に角そう言う訳だ。お前には暴走をしているワームを抹殺して貰う。」

三島は、怖い顔でそう言い、

「もし裏切ったら、お前も抹殺する。」

と、付け加えた。

どうせ脅しだろう。

そう思った俺は、

「それで脅しのつもりか？」

と聞く。

「何だと？」

三島は再び怖い顔で聞く。

「お前達人間は勝手すぎだ。

40年前にバイオテクノロジーでワームを生成し、最近になって暴走を始めたワームを35年前から研究をしているマスクドライダーシステムを完成させ、資格者に譲渡して暴走しているワームを抹殺。そんな事、責任持って自分たち人間の力で解決しろ。」

俺はこの件には一切関与しねえ。」

「それでは困る。」

我々ZECTはお前の力を必要としているんだ。完全体はお前しかないからな。

頼む。暴走をしているワームを排除してくれ。」

そう言っつて、三島は頭を下げたが、

「断る。」

と、俺は言っつた。

すると、三島の態度はうって変わり、

「残念だ。ならば此処で貴様を抹殺する！」

と、言っつた。

「お前には無理だ。」

俺はそう言い、クロックアップでその場を去った。

ウカワーム

とある住宅街・・・。

「うわああーっ！」

と、クワガタをモチーフにしたライダーが叫びながらウカワームに突進して行った。

「私を倒す事などお前には不可能だ。」

ウカワームは、クロックアップしてライダーを避けた。
それに続き、

「クロックアップ！」

ライダーはサイドバックルのボタンを押し、

「clock up」

と、電子音を発生させてクロックアップをした。

だが、ウカワームのクロックアップは、通常のクロックアップではついて行けない程だった。

「早い！」

と、ライダーが言ったとき、ウカワームは既にライダーの後に回っていた。

「何！？」

と、ライダー。

ウカワームは、ライダーが振り向く寸前に、ライダーの背中を蹴り飛ばした。

「ぐはっ！」

ライダーは蹴り飛ばされ、数メートル程飛ばされ、その様子を見ていた俺と激突した。

衝撃を受けた俺は、後ろに倒れた。

「ワームが二匹だと！？」

ライダーは驚いた。

コイツは・・・俺はコイツを知っている。

「加賀美か。どうした？」

俺はライダーに聞いた。

「お前、何故俺の事を？」

ライダーは逆に問う。

「知らないなら結構。

助けてやるから逃げろ。」

そう言つて、俺は人間の姿になった。

「天道！」

加賀美は再び驚いた。

「天道 総司。またの名を、カブト。」

ウカワームは、俺の前に現れると、そう言った。

「貴様、何者だ？」

俺が問うと、ウカワームは人間の姿になった。

「私は間宮麗奈。」

死に逝く時、私の名を呼ぶが良い。

お前に最高のプレゼントをしてやろう。」

麗奈はそう言い、その場を去ろうとした。

「待てよ麗奈。」

俺は背を向ける麗奈を止めた。

麗奈は振り向き、

「何か用か？」

と、聞く。

「決着、付けるぞ。」

「決着だと？」

お前らどう言う関係なんだ！？」

と、加賀美。

「黙つて見ている。」

俺は加賀美に言った。

「決着だと？」

愚かな。私に敵う筈が無い。」

と、ウカワーム。

「言っておくが、以前の俺とは違うぞ。」
ブーン。

カブトゼクターが俺のもとへとやって来た。

「変・・・身。」

ゼクターは、自動的にベルトに装着。

ゼクターが完全に装着されると、

「H E N S H I N !」

と、電子音が鳴り、俺はカブト・マスクドフォームに変身した。

「無駄な戦いだ。」

麗奈は、そう言っでウカワームに姿を変えた。

「キャストオフ。」

俺はカブトゼクターのゼクターホーンを180°展開。

「cast off (キャスト、オフ)」

と、電子音が鳴ると、アーマーが弾け飛び、ライダーフォームになった。

「以前もそれで私に挑戦して来たな。」

と、ウカワーム。

「あの時みたいに俺は負けない。」

「大した自信だな。」

ウカワームはクロックアップをした。

「天道気を付けろ！ぐふっ！」

加賀美はウカワームに踏みつけられた。

それと同時に、加賀美の変身が解け素顔が晒される。

「天道。確かお前もこの様にやられたのだったな。」

と、ウカワーム。

「クロックアップ。」

俺はサイドバックル（右）のボタンを押した。

「clock up (クロック、アップ)」

と、電子音が鳴り、回りの時間の流れが遅くなった。

「無駄だ。」

と、ウカワーム。

ウカワームは、クロックアップした俺に飛びかかってきた。

俺は直ぐに避けたが、ウカワームの方が数倍早く、気付いた時には変身が解けて、地面に這い蹲うかの様にして倒れており、ウカワームの片足が背中の上に乗っかっていた。

ウカワームは麗奈に戻ると、

「ライダーの力はこの程度か。」

と、屈辱的な事を言いはなった。

「くっ……。」

俺は出せる言葉が無かった。

「どうした天道総司。」

私を倒すのでは無かったのか。そのために変身したのだろうか？」

プチンッ！

俺の堪忍袋の緒が切れる。

「てめえ、ムカツクんだよ！」

そう言うのと、俺は擬態を解いた。

「お前は！？」

と、麗奈。

「お前、もう知ってんだろ？」

神代 総司・・・本名、天道 総司が俺の中にしかないって事・・・。」

そう言いながら、俺は麗奈の足を乗せたまま立ち上がる。

「それがどうした？」

麗奈はどうでも良い様に言った。

「……………」

俺は言葉につまった。

「天道 総司・・・いや、ビートルワーム。」

何故人間に味方をする？」

麗奈は質問をぶつけた。

「ZECTに対する報復、及びワームの殲滅。」

俺はそう答えた。それしか答えが無かったからだ。

「やはり貴様は裏切り者か。」

裏切り者……。そうなるかもしれないな。

ZECTの真意を知った今では……。

ウカワーム（後書き）

ZECTの真意。

それは何なのだろうか。

話が進みに連れて解るだろう。

華麗なるダブルライダーキック（前書き）

テレビ版と被っている所があります。

理由は後書きに。

あ、因みに後書きは読んでからですよ。

親父が言っていた。

後書きを読むは全て読んでからだ。

華麗なるダブルライダーキック

ZECT総本部。

此処で新たな研究が行われていた。いや、それは置いておいて・・・。

「カブトが敵側へ回りました。」

と、メガネを掛けたキザな男・三島 正人が一人の男の前で言った。

男は、

「抹殺したまえ。」

と、言う。

男の名は、加賀美^{かがみ} 陸^{りく}。

加賀美 新（かがみ あらたノガタツク）の父親である。

俺はそんな二人の会話を部屋の外で盗み聞きをしていた。

「所で、ガタツクのパワーアップの計画はどうなっているのかね？」
と、陸氏。

「順調に進んでおります。」

と、三島は答えた。

ガタツクのパワーアップ・・・。

一体、どんな計画なんだ？

「ネズミが一匹、我々の話を盗み聞きしている様だ。」

と、いきなり人差し指を扉に向けて言う陸氏。

まずい、バレたか！？

俺は早急にその場を去った。

翌朝、俺はビストロ・ラ・サルに来ていた。

「ガタツクのパワーアップ？なんだそれ？」

と、加賀美。

「多分あれだ。」

「あれ？」

「ああ。俺が天道に擬態する前の事だ。」

そう。あれは俺が生成されて間もない頃の事だった。

ZECT総本部では、新システムのパワーアップの研究が行われていた。

それは現段階でも続いている。

その新システムとは、ライダーフォームを更にパワーアップし、最強のライダーにする計画だった。

名付けて、ハイパーゼクター。

ZECTはハイパーゼクターの開発を進めているのだ。

恐らく、ガタツクのパワーアップはこれの事だろう。

「成る程な。」

と、加賀美は納得した様に頷いた。

その時、加賀美の携帯に電話が入る。

「はい！」

加賀美は電話に出ると、

「分かりました！」

そう言つて、電話を切った。

「天道。俺は今日から誰にも負けない！」

はあ？何を言っているんだコイツは。

加賀美は、笑顔でサルを出て行った。

それと入れ替わりに、一人の警官が入ってきた。

「あの、お店の方は？」

と、警官。

「俺一人だ。俺が代わりに受けよう。」

「そうですか。では、これを目立つ所に貼っておいて下さい。」

警官は、一枚の紙を取り出した。

その紙は、指名手配と書かれており、風間 大介の顔と名前が大きく載っていた。

「これは。」

「殺人容疑で逃亡中の方の写真です。」

そんな事は分かっている。問題は何故コイツが指名手配されている

のかと言う事だ。

「ご協力感謝致します。」

警官は、会釈をすると、サルを出て行った。

仕方が無い。一応、目立つ所に貼っておくか。

俺は、立ち上がると手配書をカウンターの前の壁に貼り付けた。すると、一人の男がサルに入ってきた。

指名手配中の彼だった。

「お前は。」

と、風間。

「よっ、殺人犯。」

俺は携帯を取り出した。

「何処へ掛けてるんだ？」

と、風間。

「警察に電話してるんだ。」

「待て。俺は殺してない。

誰かにはめられたんだ！」

と言う風間。

ぬれぎぬと言う所だな。

「まあそんな所だろう。お前みたいな奴に殺人が出来る訳が無い。兎に角此処にいてはまずい。家へ来い。話を聞いてやる。」

そう言い、俺はキッチンに移動。

「助かる。恩にきるよ。」

風間はそう言うのと、ほくそ笑む。

「但し、樹花が帰って来るまでの間だぞ。

仮にもお前は殺人犯だ。指名手配中の人物を妹に会わせるつもりは無い。」

と、俺は顔を出して言った。

俺は戸締まりを確認すると、風間を連れ、天道家に向かった。

「で、何があつた？」

俺は風間に聞く。

「分からない。知らない間に殺人犯にされてたんだ。」

風間は悔しそうに言った。

その時、加賀美から携帯に連絡が入った。

「どうした？」

と、俺は電話に出て行っただ。

「天道、ワームだ！一人じゃ対処しきれない！」
やれやれ。

「何処だ？」

俺は場所を聞き、

「分かった。」

と、言っで電話を切った。

「急用が出来た。直ぐ戻る。」

俺は風間にそう言い残し、天道家を後にして現場へ向かった。

現場では、ガタツク・マスクドフォームが大勢のサナギワームと一匹の赤い成虫ワーム・アキヤリナワームを相手にして戦っていた。どうやら俺のお仲間相手に本当に手こずってららしいな。

「加賀美。加勢してやる。」

そうガタツクに言っで、カブトゼクターが俺の元へやってくる。

俺はゼクターを掴むと、

「変身。」

と、言い、ベルトに装着。

すると、マスクドライダーシステムがジョウントと言っ機能を使っで転送されて来て瞬時に身を包み、カブト・マスクドフォームへと姿が変わった。

「キャストオフ。」

俺はゼクターホーンを倒す。

「cast off」

と、電子音が鳴り、アーマーが2000m/sで弾け飛び、

「change beetle」
チェンジ
ビートル

と、電子音を鳴らしてライダーフォームに移行。

それと同時に、

「キャストオフ！」

と、ガタツクもキャストオフをした。

「cast off」

と、電子音を鳴らし、アーマーが2000m/sで弾け飛び、

「change チェンジ stag スタッグビートル beetle」

と、ライダーフォームに移行。

「天道、雑魚は任せた！」

と、ガタツク。

おいおい、そりゃ無いだろ。

そう思いつつも、俺はカブトクナイガン・クナイモードで雑魚・サナギ体共を攻撃する。

きりが無い。

「クロックアップ。」

俺はサイドバックルのボタンを押し、

「clock up」

と、電子音を鳴らしてクロックアップした。

その瞬間、ガタツクとアキャリナワームを除く総ての時間の流れが遅くなった。

その隙にクナイガンで総てのサナギ体を爆裂霧散させ、ガタツクの攻撃で吹っ飛んだアキャリナワームの前に移動。

「One-two-three ワンツースリー」

と、フルスロットルを順番に押してパワーをチャージ。

その直後、ゼクターホーンをマスクドフォームの状態にし、

「ライダーキック。」

と言うと、再度ライダーフォームの状態に戻す。

それと同時に、ガタツクもライダーキックを発動させ、アキャリナワームに向かって走り、ジャンプ。

そして、

「rider kick ルライダーキック」

の電子音と共に、俺とガタツクのダブルライダーキックをアキヤリ
ナワームへ華麗に叩き込み、爆裂霧散させた。

「clock over」

と、電子音が鳴って時間の流れが元に戻る。

「天道。」

と、ガタツクが俺を呼ぶ。

俺は変身を解き、

「何だ？」

と、聞き返す。

「天道。お前、ワームなんだろ。」

何で他の奴らみたいに人を襲わないんだ？」

「俺は人は襲わない。」

お婆ちゃんが言っていた。

人の命を奪うものは人生そのものが終わっている、ってな。」

ガタツクは変身を解き、

「ワームになっても天道はやっぱり天道だな。」

と、言った。

華麗なるダブルライダーキック（後書き）

4話目にしてテレビ版と被せましたが、これには理由があるのです。その理由は、妄想です。

テレビの27話で放送されなかった部分を妄想して書いてだけです。因みに、テレビ版の天道はフォームではありませんし、神代と言う偽名は使っていません。

では、次回もお願いします。

手下

ZECT総本部。

「例のものが完成致しました。」

と、三島 正人。

陸氏はコントラバスを弾きながら、

「そうか。早速渡してくれたまえ。」

と、言った。

「解りました。」

と、三島。

その頃、俺はと言うと、カブトエクステンダーに乗って天道家に向かっていた。

その途中、サルの前で風間を見掛けた。

俺はサルの前にエクステンダーを止め、

「何してるんだ？」

と、声を掛けた。

「お前は。」

と、風間。

ん、コイツ・・・本物か？

「俺の家で待つてると言った筈だぞ？」

と、俺は試しに聞いてみた。

「何の事だ？」

風間は何も知らない様なそぶりで聞いた。

「どうやら本っ！？まずい！」

樹花が危ない！

俺はエクステンダーに乗り込むと、急いで天道家に向かった。

天道家に着くと、俺は部屋に飛び込み、

「樹花！」

と、叫んだ。

すると、物陰から、

「お兄ちゃんおっ帰り」

と、樹花が飛び出してきた。

「樹花、無事だったか。」

俺は樹花を抱く。

何が何だか分からない樹花。

と、思いきや。

樹花は俺に気付かれない様にほくそ笑んだ。

気付いてるっちゅうに・・・。

そう言えば、風間ワームはどうしたんだろう？

「樹花。お前が帰って来た時、メイクアップアーティストの風間大介と言う男がいなかったか？」

「風間さん？お兄ちゃんの帰りが遅いから帰ったよ？」

と、樹花。

だが、それは恐らく嘘だ。

風間に擬態したワームが樹花を襲い、樹花に擬態したに違いない。

「おい、本物は何処へやった？」

「え？何の事？」

とぼける樹花ワーム。

「本物の樹花だ。お前、ワームだろ。」

樹花ワームは、驚いて俺を突き飛ばした。

そして、部屋を出て玄関に向かった。

させるか！

俺は、樹花ワームが玄関の扉を開け、外に出る寸前の所で腕を掴んで引っ張った。

樹花ワームは、逃げられないと観念したのか、逃げるのを諦めて部屋に戻る。

「一つ聞く。

お前、ジェノミアスワームだな。間宮 麗奈の差し金で動いているんだろ？」

樹花ワームは、首を縦に振る。

「何のために妹にまで手を出す？」

「地球を乗っ取る為。」

と、答える樹花ワーム。

「やはり目的はそれか・・・。」

で、樹花は無事なんだろうな？」

俺がそう聞くと、今度は首を横に振った。

と言う事は、樹花は無事では無いと言う事だ。

「何をした・・・。樹花に何をしたんだ！？」

樹花ワームは、

「体液を嚙って殺しちゃった。

こうやってね！」

と、言つて、ジェノミアスワームの姿になると、いきなり頭の角を突き刺そうとした。

だが、カブトゼクターが飛んできて、ジェノミアスワームを攻撃して怯ませた。

ジェノミアスワームは、立ち直ると窓ガラスを割って家を飛び出した。

俺はカブトゼクターを掴むと、それをベルトに装着してカブト・マスコッドフォームに変身し、ジェノミアスワームを追いかけた。

逃がさん！

「キャストオフ！」

俺はゼクターホーンを180°展開し、

「cast off」

と、電子音を鳴らし、アーマーを弾き飛ばす。

「change beetle」

と、ライダーフォームに移行。

ジェノミアスワームは、クロックアップをした。
無駄な事を・・・。

「クロックアップ。」

俺はサイドバックルのボタンを押し、

「clock up」

と、電子音を鳴らしてクロックアップを発動。

その瞬間、俺を除いた全ての時間の流れが遅くなる。

当然、クロックアップ中のワームもだ。

俺はゼクトマイザーを取りだし、ジェノミアスワームに向かって、カブトムシがモチーフのマイザーボマーを発射。

マイザーボマーは、ジョウントと言う機能で無限に出てくる。

マイザーボマーはジェノミアスワームを取り囲むと、次々と当たって小爆発を繰り返した。

ジェノミアスワームは小爆発に苛まれ、身動きが取れないでいた。

俺はその隙に、カブトクナイガンを取りだし、アックスモードで攻撃をする。

ジェノミアスワームは怯んだが、マイザーボマーは無くなるまで小爆発を続けた。

そして、全てが爆発し終わると、ジェノミアスワームは立ち直った。だが、動こうとはしなかった。

チャンスだった。

「one-two-three」

と、フルスロットルを押して行き、

ゼクターホーンをマスクドフォームの状態に戻した。

が、その先へ行動出来なかった。

そう、ジェノミアスワームを倒すと、妹と一緒に消えるからである。

そんな俺に気付いたジェノミアスワームは、

「どうしてトドメを刺さないの？」

と、聞いてきた。

「俺にかけがえのない妹を消す事が出来ると思うか？」

俺は聞き返す。

「お兄ちゃん……。」

と、ジェノミアスワームは呟いた。

「すまない、樹花・・・。」

「え？」

俺はゼクターホーンに手を掛ける。

「ライダー・・・キック・・・。」

俺はゼクターホーンを180°展開。

カシャッ！

と、音が鳴る。

「r i d e r k i c k」

の電子音と共に、俺はジェノミアスワームに回し蹴りを放った。
しかし、ジェノミアスワームは消滅しなかった。

手加減をしたからだ。

「どうして？」

と、ジェノミアスワーム。

「お前には利用価値がある。俺の為に働け。」

ジェノミアスワームは、少し躊躇ったが、首を縦に振った。

「そうと決まれば早速仕事だ。」

麗奈の弱点を教える。」

「麗奈様の弱点？」

ごめんなさい。私には解りません。」

と、申し訳なさそうに答えるジェノミアスワーム。

「だったら探ってこい。」

「分かりました。」

ジェノミアスワームは、そう言って何処かへ飛び去った。

手下（後書き）

天道ワーム、何をするつもりだ！？

強くなれ、影山元隊長

俺は今、天童^{てんどう} 宗司^{そうじ}としてZECTのシャドウ隊に隊長として潜り込んでる。

勿論、天道の姿では無い。天道は面が割れてるからである。

「影山！焦るな！ワームの思いつぼだぞ！」

と、俺はアラクネワームと戦ってるザビー・マスクドフォームに言う。

それと同時に、ピエラワームがクロックアップをする。

「キャストオフ！」

ザビーはザビーゼクターに手を掛けるが、

「影山。マスクドフォームで倒してみろ。」

と、俺は無理難題を要求。

「た、隊長！正気ですか！？」

と、ザビーは聞く。

「正気だ。」

「でも、クロックアップはタキオン粒子が流れるライダーフォームでないと知覚出来ません。」

「無駄口を叩いてる暇があるならマスクドフォームで倒してみろ。」

敵はお前の真後ろだ！」

俺が言くと、ザビーは後を向く。

だが、時既に遅し。

ピエラワームはザビーの目の前でパンチを繰り出した。

ザビーはパンチを受け、5メートル程飛ばされてしまった。

ザビーは起きあがって、

「何が起こった！？」

と、叫んだ。

やれやれ……。

俺は一旦持ち場を離れ、擬態を解く。

待てよ。

わざわざ天道に擬態してゼクターを呼ばなくても良いんじゃないか？
そう思った俺は、試しにカブトの容姿を想像。

すると、俺の身体はカブト・マスクドフォームへと変態した。

おっと、これは重大な問題だ。

ワームがマスクドライダーに擬態出来るとなると大変な事なってしまう。

他のワームが擬態出来る事に気付かないで欲しい。

そう思いながら、俺はザビーの下へ向かった。

するとザビーは、クロックアップしてるピエラワームにボコボコにされていた。

そして、ザビーは俺の存在に気付き、俺の下へと攻撃を喰らいながらもやってくる。

「カブトか・・・頼む！俺の代わりにライダーフォームでワームを倒してくれ。」

と、ザビーはせがむ。

「何故キャストオフをしない？」

俺はザビーに聞く。

「隊長にマスクドフォームで倒せと命令されて。」

ザビーは、今にも泣きそうな声で言った。

「だったらマスクドフォームで倒せば良いだろ。」

と、俺はザビーに言った。

しかしザビーは、

「クロックアップはタキオン粒子が流れるライダーフォームでなければ知覚出来ない。」

と言う。

「感覚で補え。」

俺はそう言いながら、後から接近してきたピエラワームを振り向いて殴りつけた。

「お前・・・何者だ。」

と、ザビー。

「お前が知る必要は無い。」

そう言つて俺は、カブトゼクターに手を掛けるが、ゼクターはびくともしなかった。

「やはり本物でなければ駄目か。」

「本物？」

と、ザビーは疑問を浮かべる。

「少し待つてろ。」

俺はそう言つて、ザビーから遠ざかり、物陰に隠れると擬態を解き、天道に擬態。

その後、カブトゼクターを呼び、本物のカブト・マスクドフォームに変身し、ザビーの下へと戻った。

「何処にいつてたんだ？」

と、ザビー。

「気にするな。さつさと終わらせるぞ。」

俺はカブトゼクターに手を掛け、

「キャストオフ。」

と言つてゼクターホーンを180°展開。

「cast off」

と、電子音が鳴り、アーマーが弾け飛び、

「change beetle」

と、電子音を鳴らしてライダーフォームになる。

それに続き、

「change wasp（チェンジ、ワスプ）」

と、電子音を鳴らしてザビーもライダーフォームになる。

俺とザビーは、

「clock up」

と、電子音を鳴らしてクロックアップする。

クロックアップしたザビーは、ピエラフォームを追いかけると、一発ぶん殴つて怯ませて羽交い締めにした。

「カブト！トドメだ！」

と、ザビーは言う。

俺は、

「one-two-three」

と、フルスロットルを押し、ゼクターホーンを180°展開してライダーパワーをチャージ。

「ライダー、キック。」

俺はゼクターホーンを再び展開し、

「rider kick」

と、電子音を鳴らしてライダーキックを発動。

俺はそのままピエラワームの前に移動し、ピエラワームに回し蹴りを放った。

ドォーン！

と、爆発が起きてワームは消滅し、ザビーは爆風と共に吹き飛ばす。

「clock over」

と、クロックアップが解除される。

俺はそのままザビーを放置し、少し離れた所まで移動すると、変身を解き、更に擬態を解いて天童に擬態する。

そして、ザビーの所へ戻った。

「影山。ワームはどうした？」

俺が聞くと影山は、

「言われた通りマスクドフォームで倒しました。」

と、嘘を吐いた。

俺は握り拳を作り、影山の頬をぶん殴った。

「隊長！いきなり何をするんですか？」

と、影山。

「影山。何故ライダーフォームになった？」

「見てたんですか？」

「言ったはずだぞ。」マスクドフォーム”で倒せとな。」

「でも……。隊長は！？」

もし隊長がザビーだったら倒せたと言っんですか!？」

「当然だ。それに、雑魚なら生身でも倒せる。」

ま、せいぜいマスクドフォームで倒せる様になっておく事だ。」

俺はそう言っで、影山と別れた。

その後、影山は自分の弱さに屈辱を感じたと言っ。

強くなれ、影山元隊長（後書き）

何がしたいのか自分でも解らなかつたり・・・。
所で、天童 宗司って・・・。

最強のライダー

俺は未だ、天童 宗司としてZECTにいる。

「天童、田所にこれを渡せ。」

三島は、カブトムシがモチーフの見たこともないゼクターを出した。

「これは？」

「我々ZECTが開発したハイパーゼクターだ。これを装備したライダーは最強になれる。」

これを必ず田所に渡せ。」

田所か・・・って、田所って誰？

加賀美に聞いてみるか。

ビストロ・ラ・サル。

「ひより、加賀美は来てないか？」

俺はサルに入るなり、ひよりに聞いた。

「加賀美はまだ来てない。」

加賀美の奴、何処で何をしてるんだ。」

と言うひより。

「天道、加賀美の代わりにオリーブオイルを取って来てくれないか？」

「何故俺が。」

「頼むよ天道。」

「で、何処に取りに行けば良い？」

「例の店だ。」

ひよりは言う。

そして俺は例の店へ。

しかし、オリーブオイルは入荷されていなかった。

店主は、

「工場に行けばある。」

と言うので、俺はその工場へ。
だが、その工場には人の気配が無かった。
おかしい。

工場に誰もいないなんて。
俺は工場内部を搜索した。

「ったく、誰もいないのかよ。」
と、呟く俺。

その時だった。

奥の方から、

「うっ！」

と言う人の呻き声が聞こえた。

俺はその声の元を辿った。

「この向こうか？」

俺は扉の前に立っていた。

どうやら呻き声は扉の向こう側らしい。

俺は思い切って扉を開けた。

すると、顔に袋を被され、手首を天井に吊されて身動きが取れない
状態の人物を発見。

「誰だ？」

ソイツは言う。

聞き覚えのある声だった。

「加賀美か？」

俺は問う。

「天道か。頼む、助けてくれ！」

加賀美らしき人物は言った。

俺は顔の袋を取り、何があつたのかを聞いた。
加賀美は、

「ワームにはめられた。」

と言う。

「加賀美、分かる様に話せ。」

「間宮 麗奈だ。あいつがひよりをさらって。

それで、追いかけたら此処に辿り着き、ひよりと間宮 麗奈がワームになって、二人がかりで俺を襲って来た。」

成る程、それでこう・・・待て、変身はしなかったのだろうか？

「加賀美、変身はしなかったのか？」

「ベルト、奪われた。」

何だって！？

「騙されるな！そいつはワームだ！」

と、加賀・・・。

「加賀美、何か言ったか？」

「天道、そんな事より後。」

俺が後を振り向くと、マスクドフォームのガタックが立っていた。

「どけ天道！」

と、ガタック。

「何をするつもりだ！？」

「そいつを倒す！」

ガタックは俺の後で吊されてる加賀美を示して言った。

このガタック、熱血漢が漂ってくる。

と言う事は、加賀美なのだろうか？

それとも・・・。

「解け。」

俺はガタックに言う。

「そのワームを倒してからな！」

ガタックは本気だ。

「天道・・・。どいてやってくれ。」

後で吊されてる加賀美は言った。

「何を言ってる。あいつはお前を殺そうとしてるんだぞ。」

「それは分かってる。それでワームの気が済むのなら、俺はワームに擬態されても構わない。」

「バカやろう！お前は必ず助ける！」

「天道・・・・・・・・。」

「黙ってる。」

俺は加賀美にそう言う。

「相談事は終わったか？」

忽然と、間宮 麗奈が現れて言った。

麗奈は、

「二人まとめて倒せ。」

と、ガタツクに言った。

ガタツクはガタツクバルカンを連射した。

だが、カブトゼクターが飛来し、飛んでくる弾丸を全て受け止める。
ガタツクは攻撃をやめ、キャストオフをした。

「cast off」

電子音がなってアーマーが弾け飛び、

「change stag beetle」

と、ガタツクはライダーフォームになる。

「変身。」

俺はカブト・マスクドフォームに変身し、直ぐにキャストオフした。

「change beetle」

と、電子音がなってライダーフォームに移行。

ガタツクはクロックアップをする。

「クロックアップ。」

俺はサイドバックルのボタンを押し、

「clock up」

と、電子音をならしてクロックアップを発動させた。

「お婆ちゃんが言っていた。」

人のものを盗む奴は、もつと大事なものを無くす。」

俺は得意の語録を披露しながらガタツクに近付いて行く。

ガタツクは、ガタツクカリバーで襲い掛かる。

俺はひょいと避け、ガタツクの腹をパンチ。

「ぐっ！」

ガタツクは体勢を崩して怯む。

「clock over」

両者のクロックアップが解除され、

「何時の間に!？」

と、加賀美が驚く。

「ガタツクの資格を奪い取ったのにそんなものか？」

麗奈はガタツクに言い、ウカワームに姿を変えた。

「俺が強いんだ。」

俺はウカワームに言う。

ウカワームは、巨大なハサミで攻撃してきた。

「クロックアップ。」

俺は再びクロックアップ。

「無駄だ。」

ウカワームは俺の前に回り、

「遅い」

と言い、手加減無しに攻撃。

「がはっ！」

俺は体勢を崩してその場に怯む。

ウカワームは、躊躇う事無くトドメを刺してきた。

だが、例のハイパーゼクターが飛来し、ウカワームの攻撃を防御。

「何だコイツは？」

動揺するウカワーム。

「形勢逆転だな。」

俺は飛び回るハイパーゼクターを掴み、サイドバックルの左側に装着。

「そんなものを付けてどうなる事でもないぞ。」

と、ウカワーム。

「それはどうかな。」

俺はハイパーゼクターに手を掛け、

「ハイパー、キャストオフ。」

と言い、ハイパーゼクターの角^{つの}を90°。倒す。

「Hyper cast off」
ハイパーキャストオフ

電子音になり、俺の身体を光が包む。

そして、光が消えた時には、ライダーフォーム時のアーマーがシルバーのカプテクターになっており、中央にゼクターの角の柄があった。

「change, hyper beetle（チェンジ、ハイパービートル）」

こうして俺はハイパーフォームになった。

「何だその姿は!？」

と、ウカワームは驚く。

さっさと終わらせる!

「ハイパークロックアップ。」

俺はそう言いながらハイパーゼクターのボタンを押す。

「Hyper clock up」
ハイパークロックアップ

の電子音と共にカプテクターや足や腕のアーマーが展開し、周囲の時間がクロックアップ時の時間の流れの1/10（10分の1）になった。

ドラ もんのタンマ オッチで時間が止まった時の状況に等しい。そのおかげで、ウカワームの動きも完全に止まっているかの様だ。

俺は再びハイパーゼクターの角を倒す。

「maxim, rider power（マキシム、ライダーパワー）」

と、電子音がなってライダーパワーがチャージされる。

「one-two-three」
ワンツースリー

と、俺はカプテクターのフルスロットルを押し、ゼクターホーンを180°展開。

「ライダー、キック。」

そう言つて、俺は再びゼクターホーンを展開した。

「rider kick」

と、電子音になる。

俺はそれと共にジャンプをし、ウカワームに回し蹴りを放った。
その瞬間、

ドッカーン！

と、ウカワームはもの凄い爆発を起こして霧散した。

俺はその爆風により吹き飛ばされガタツクに激突。

ガタツクは倒れ、俺はその上に乗っかっていた。

「clock over」

と、クロックアップが解除され、時間の流れが元に戻る。

だが、戻ったのはそれだけじゃなかった。

同時に、強制的にマスキドフォームに戻されたのだ。

恐らく、パワーの使いすぎだろう。

「どけよ天道……。」

と、ガタツク。

そうだ、まだコイツが残っていたんだ。

俺はガタツクを殴りつける。

しかし、ガタツクはクロックアップをして避けた。

ドン！

俺のパンチは地面に直撃。

ちっ！

「キャストオフ。」

俺はゼクターホーンを展開。

しかし、

「miss take」
ミスメイク

と、電信音を鳴らしてゼクターホーンが自動的に元の位置に戻る。

俺は何度か繰り返したが、

「miss take」

を繰り返すだけだった。

「こんな現象初めてだ！」

俺はそう言う。

だが、誰も聞いてはくれなかった。

「変身解いてワームになったらどうだ？」

と、ガタツクが言った。

俺も最初はそうしようと思った。

だが、相手はライダーだ。

ワームが束になってかかった所で勝てる見込みはない。

「俺の負けだ。」

俺はガタツクに言った。

「天道！？」

と、惨めに吊されてる加賀美。

「ならば変身を解け。」

ガタツクは言った。

「天道、畏だ。」

加賀美はそう言ったが、俺は加賀美の言葉を無視して変身を解く。

ガタツクが本物の加賀美だと判断したからだ。

しかし、現実はその甘く無い訳で・・・。

「かかったなあ！」

ガタツクはそう言い、ダブルカリバーで斬りかかって来た。

ガタツクの二刀流炸裂。

俺の身体からは血が噴き出す。

「てんどー！」

と、吊されてる本物の加賀美が叫ぶ。

「トドメだ！」

と、ガタツクは俺をダブルカリバーで挟み込んだ。

最強のライダー（後書き）

ついに出たハイパーフォーム。
小説先取りと言う奴ですかね。
所で、天道の運命や如何に！？

ダークカフト（前書き）

噂のダークカフト出します。

ダークカブト

ガタツクはダブルカリバーで俺を挟み込む。

俺は加賀美の言う通りに罠に掛かってしまったのだ。

「どうした天道？」

ガタツクは聞く。

「離せ！」

俺は叫ぶ。

「おいワーム！天道を離せ！」

加賀美はガタツクに向かって言った。

「わめくな。お前から先に殺すぞ？」

とガタツク。

俺は低い声で、

「てめえ……。」

と言い、擬態を解いた。

「俺はこの時を待っていたあ！」

ガタツクは、挟む力を上げた。

コイツ、俺を殺すつもりだ。

「貴様、仲間を殺すつもりか？」

「仲間？」

「俺とお前は同じワーム。」

お前は仲間を殺せるのか？」

ガタツクは俺を離し、

「ならば仲間だと言う事を証明してくれ。」

と、言った。

「そうだ、コイツを殺せ。」

ガタツクは加賀美を指差した。

俺に、加賀美を殺せだと！？

そんな事、出来る筈が無い！

だが、断ったら俺は確実に死ぬ。

それだけは避けたかった。

「どうした。やらないのか？」

ガタツクは聞く。

仕方ない。

「加賀美、お前には・・・。」

俺が言いかけたその時、ガタツクが2メートル程吹き飛んだ。

いや、何かが当たったと言った方が良いか。

「clock over」

電子音になり、目の前にカブトムシをモチーフにした真っ黒なライダーが現れた。

容姿はカブトと全く同じだ。

シルエットにすれば見分けがつかないだろう。

「お前は？」

俺は聞く。

黒いライダーは、俺の問いには答えなかった。

ガタツクは、

「何者だ？」

と聞く。

黒いライダーは、問答無用でガタツクを攻撃。

ガタツクは大ダメージを受け、変身が解けて加賀美ワームの素顔が晒される。

チャンス！

俺は頭の角で、加賀美ワームを突き刺し、直ぐに抜いた。

加賀美ワームは、ジェノミアスワームになり、その場に倒れた。すると、黒いライダーがいきなり俺を攻撃してきた。

「ワームを殺すものは、例え誰が相手でも許さない。」

と、黒いライダー。

コイツ、ワームの！

「ほお。ならばお前もそれに含まれるな。」

「問答無用！」

黒いライダーは、カブトクナイガン（？）を出し、俺を切りつける。それと同時に火花が散る。

「ぐはっ！」

黒いライダーは、

「one-two-three」

と、フルスロットルを押し、ゼクターホーンを展開。

「ライダー、キック。」

黒いライダーは、ゼクターホーンを再び展開。

「rider kick」

と、電子音になり、黒いライダーは回し蹴りを放った。

しかし、俺のゼクターが飛来し、ライダーキックを受け止めた。

ゼクターは、破損してその場に落ちた。

俺はそれを拾い、天道に擬態。

「変・・・身。」

俺はゼクターをベルトに装着したが、カブトには変身出来なかった。ゼクターが完全に壊れたのだ。

「お前、ライダーか。」

面白い。次に会うときまでゼクターを直しておくんだな。」

黒いライダーはそう言い、その場を去った。

黒いライダー・・・。

一体何者なのだろうか・・・。

ダークカブト（後書き）

カブトゼクター壊れました。
ZECTは直してくれるだろうか・・・。

融合

「はあ。」

と、客のいないビストロ・ラ・サルでため息を吐く俺。

その様子を厨房で見っていた竹宮 弓子が突然、

「天道君、元氣無いわねえ。」

と、ひよりに言う。

「昨日からずっとああなんだ。」

と、ひより。

ガチャ

扉が開き、加賀美がサルに入ってくる。

「天道……。」

と、加賀美。

「どうした？」

「駄目だった……。」

加賀美はそう言って、壊れたカブトゼクターを渡す。

「可哀想に……。」

と、ひよりが側に来てゼクターを手にする。

すると、カブトゼクターは発光し、みるみる内に元の状態へと戻っていく。

そして、空中を元氣よく飛び回った。

自己修復機能か！？

いや、そんな筈は無い。

兎に角、ゼクターが直って安心だ。

「良かったな、天道。」

加賀美は笑顔でそう言った。

ガチャ

俺は扉を開いた。

「どこ行くんのだ？」

と、加賀美。

「お前が知ることでは無い。」

そう言い残し、俺はサルを後にした。

そして、向かった先は、例の黒いライダーの^{もと}下。

と言うより、ワーム倒しと言えば良いのか・・・。

そんな事を考えていると、サナギワームが後からいきなり襲いかかってきた。

それに気付いた俺は直ぐに避け、サナギ体を殴りつける。

「まだまだだな。」

サナギ体は樹花に擬態し、

「自信あつたんだけどなあ・・・。」

と言う。

すると、突然そこへ黒いカプトゼクターが飛来してきた。

例の黒いライダーか!?

いや、資格者はいない。

と言う事は、言づてかなんかか?

「用があるならさっさと話せ。」

俺は黒いゼクターに聞く。

黒いゼクターは空高く飛び上がり、

「赤のカプトゼクターを呼べ」

と、空中に見えない文字を描いた。

何だか分からないが、一応呼んでやるか。

俺はカプトゼクターを呼ぶ。

カプトゼクターは直ぐに飛来した。

その頃、AREA-Xでは・・・。

「三島さん、それ本気ですか!？」

と、シャドウ隊のリーダー影山。

「本気だ。」

「そんな無茶な!?!やはりこの計画は!?!」

「私に逆らう気か?」

「いや、そんなつもりは・・・。」

「だったら黙って作戦に参加しろ。それがお前の任務だ。」

三島はそう言うと、AREA-Xを出て行った。

一方、当の俺達と言うと・・・。

「何が・・・起きた・・・。」

俺は黒いゼクターとカプトゼクターが発光して一つのゼクターになったのを確認した。

見た目は普通の赤いカプトゼクターだ。

だが、何か違和感を感じる。そんな感じなのだ。

一体、どういう事なのだろうか・・・。

融合（後書き）

融合に何か意味あるのか？
真相は次回！

未来から来た俺（前書き）

すいません。先にこれをやります。

未来から来た俺

二つのカブトゼクターが融合した。
一体、どう言う事だ。

分からない・・・何もかも分からない事だらけだ。
因みに、俺は今、ワームの大群に囲まれている。

俺は樹花と背中合わせにして、

「樹花・・・お前は逃げる。」

と、言う。

「お兄ちゃんは!？」

と、樹花。

「俺はコイツ等を片づける。」

そう言い、樹花を逃がした後、俺はカブトゼクターを呼ぶ。

「変身。」

俺はゼクターを掴んでベルトにセット。

俺の身体は瞬時にカブト・マスクドフォームに変態。

その後、俺は直ぐに、

「キャストオフ。」

と、ゼクターホーンを180。展開。

「cast off」

マスクドアーマーが吹き飛び、周囲のワームを蹴散らす。

だが、それでも少し残っていた。

「change beetle」

と、ライダーフォームに移行。

俺はクナイモードを装備し、大群を相手に立ち向かっていく。
しかし、ワームの数はなかなか減らない。

その時。

ズドン!

と、いきなり爆音が聞こえ、それと共に爆風が起き、ワームの大群

が全て消え去った。

何が起こったのだろうか。

舞い上がった煙のおかげで視界が悪いが、その中に何者かが立っている事だけは確認が出来た。

やがて、視界が良くなり、何者かの姿がハッキリとして来た。

それは、カブトのハイパーフォームに似ていた。

腰にベルトを付け、カブトゼクターがセットしてある。

紛れもなくカブトそのものだ。

俺はそいつに、

「何者だ。」

と聞く。

そいつは、

「天の道を往き、総てを司る男・・・俺の名は、天道 総司。」

と言った。

俺が・・・二人！？

どういう事なんだ・・・。

自称・天道 総司は変身を解き、

「大きくなったな。」

と、俺に近付きながら言った。

近くまで来て解ったが、そいつは俺自身だった。

俺は変身を解き、

「どういう事だ？」

と、腕を組みながら言う。

「何がだ？」

と、もう一人の俺も腕を組んで言った。

「俺が二人いる理由だ。」

俺はもう一人の俺に言った。

もう一人の俺は、俺に理解不能な言葉で言い返した。

「7年前をひっくり返しに来た。それだけだ。」

と・・・。

「どう言う意味だ？」

「歴史を変えに来たと言ったんだ。」
と、もう一人の俺。

歴史を変えるだと？

「詳しく聞く。家へ来い。」

俺はもう一人の俺を自宅へ招いた。

「それで、何の為に歴史を変えに来たんだ？」

俺はもう一人の俺に聞く。

「妹の為だ。」

「妹・・・樹花の為か？」

俺はもう一人の俺に聞く。

もう一人の俺は、

「ひよりだ。」

と、意外な事を口にした。

「ひよりだと？」

俺の妹は樹花じゃないのか？」

「本来ならな。」

「どういう事だ？」

「俺が歴史を変えてしまった為にタイムパラドックスが起こったんだ。」

タイムパラドックス・・・。

何故か俺はこの言葉に違和感を覚えた。

天道死す

「これをお前に託す。」

そう言つて、もう一人の俺はハイパーゼクターを出した。

「もう間に合っている。」

俺はそう言い、ハイパーゼクターを出した。

「だが、くれると言うのなら貰つておこう。」

俺はもう一人の俺からハイパーゼクターを取ろうとしたが、もう一

人の俺は素早く引つ込めた。

「お婆ちゃんが言っていた。

人のものを盗む奴は、もつと大事なものをなくすと。

既に持っているならやらない。」

と、もう一人の俺。

そこで俺は、

「お婆ちゃんが言っていた。

二兎を追う者は二兎とも取れつてな。」

と言い、無理矢理奪い取った。

その時、俺の携帯が呼び出しをする。

ZECTの岬からだった。

俺は通話ボタンを押し、

「どうした？」

と、聞く。

『ZECTが風間 大介の死を確認したわ。』

岬はそう言った。

「風間・・・大介が・・・死んだ？」

『兎に角ZECTに来てちょうだい。』

岬はそう言つと、強引に電話を切った。

「お前は此処にいる。もうすぐ樹花が帰ってくる。

俺が帰るまで相手をしてやってくれ。」

俺はそう言い、岬の下へ向かった。

「皆集まってるわ。こっちよ。」

と、岬は言い、安置所へと案内。

安置所に入ると、ガタツクの加賀美、ザビーの影山、サソードの神代 剣がいた。

岬は風間の遺体が入っているケースを開ける。

「彼を殺したのはワームよ。」

岬はそう言った。

加賀美は閉じているケースを叩き、

「こんな事になるなんて……。」

と、涙声で言った。

俺は風間の遺体に触れる。

何だ、この感覚……。

ワームの肌か？

と言う事は、この遺体はワームの擬態と言う可能性が高いな。ワームであって欲しい。

俺はそう思った。

「お前達、風間に擬態してるワームを倒しに行くぞ。」
と、影山が言った。

「ああ。こんな事するなんて許せない！」

と、怒る加賀美。

3人は、風間ワームを倒しに行った。

「天道君はいかないの？」

と、岬。

「岬、お前にだけ教えておいてやる……。
この遺体はワームの擬態だ。」

「どうして解るの？」

と、疑問の表情を浮かべる岬。

俺は岬に、

「ワームが擬態出来るのは外見と記憶だけだ。」

人の肌までは真似出来ない。これは俺がワームだからこそ言える事だ。」

と、言いながら、風間の遺体に擬態したワームに近付く。

「天道君がワーム？それってどういう事？」

「三島に聞け。」

まあ、聞いた所で教えてはくれないだろうがな。」

と言い、俺は本来の姿に戻る。

「どうするの！？」

と、岬。

「殺す。」

そう言った俺は、風間の遺体に擬態したワームを粉碎し、代わりに俺がケースの中に入り、風間の遺体に擬態する。

「お前は帰れ。」

俺は岬に言う。

「でも……。」

と、岬。

「もうすぐ三島が来る。」

見つかる前に帰れ。」

「分かったわ。」

岬はそう言って、俺の入っているケースを閉めてから安置所を出て行った。

それから暫くすると、二人の人物が安置所に入り、俺の入っているケースを開けた。

俺が目を開けると、三島と間宮 麗奈の二人が立っていた。

ん、何で間宮 麗奈が此処にいるんだ？

この間、俺が粉碎した筈だ。

なんて、深く考えてもしょうがない。

俺は起きあがり、ケースから出た。

「こんなにも巧く行くとはな。」

と、麗奈。

「俺の作戦で失敗した事は一度も無い。」

三島が自信満々で言う。

すると、三島の携帯が呼び出しをする。

「三島だ。」

・・・そうか。

取りに行かせる。」

三島は電話を切り、

「ドレイクゼクターを取りに行け。」

と、俺に命令した。

と言う事は、風間は本当に死んだと言う事になる。

取り敢えず、影山の所に行こう。

俺は安置所を出ると、天道に擬態し直し、影山の所に向かう。

その途中、神代のじいやである人類の宝を目撃。

「出歩いては駄目ですよ。」

と、俺は人類の宝をデイスカビル家に連れて行き、

「気を遣わなくても良い。」

と言う人類の宝を布団に寝かせる。

そして、おかゆを作って食べさせる。

だが、人類の宝はお腹を空かせていないらしく、残してしまった。

そこへ、

「食べないならあたしが貰うよ。」

と、ゴンが来て持つて行く。

此処で食べれば良いのに・・・。

不審に思った俺は、こっそりゴンの後を付けた。

ゴンはある洞窟に入って行き、そこで風間におかゆを食べさせた。

そんなゴンに俺は、

「やはりそう言う事か。」

と、言いながら、風間に近付く。

ゴンは立ち上がり、俺の行く手を阻む。

「駄目！」

ゴンは言う。

俺はゴンを避け、

「俺達のはめられたらしい。」

と言いながら、風間に近寄る。

「そうみたいだな。」

と、風間。

「向こうがはめたんならこっちはめてやろう。」

俺は風間に言った。

その頃、影山はある場所で風間を待っていた。

「影山さん、何やってんだ？」

と、遠く離れた所から様子を見ていた加賀美。

「黙って見ている。」

真実が明らかになる。」

と、同じく様子を見ていたもう一人の俺が言う。

すると、風間が現れ、影山に接触。

因みに、この風間は本物である。

「ドレイクグリップだ。」

影山は風間にドレイクグリップを渡し、

「今日からお前がドレイクだ。」

と、付け足した。

そんな二人に、

「待て！」

と、俺は近付いて言った。

「そいつは偽・・・本物だ！」

と、風間を指差して言う俺。

風間は、

「あっちが本物だ！」

と、指差して言う。

「大介が二人！？」

と、離れて様子を見ていたゴンが驚いて言った。

俺は風間からアキヤリナワームに直に擬態。

風間は速攻でドレイクに変身。

だが俺はドレイクグリップを奪い、風間の変身を解いた。

その後、俺は風間に擬態し、ドレイクに変身。

そこへ、

「待て！」

と、加賀美ともう一人の俺。

「手の込んだ事を！」

と、加賀美。

もう一人の俺は、

「お婆ちゃんが言っていた。

手の込んだ料理ほどまずい。

どんなに真実を隠そうとしても、隠しきれるものじゃないと。」

と、語録を披露。

その後、二人はライダーに変身。

「受けとれ本物よ！」

俺は変身を解き、ドレイクグリップを本物に投げた。

「何をしてる！？」

と、影山。

俺は天道に擬態し、

「俺と風間でお前をはめたんだ。」

と、影山に言った。

「天道が二人！？」

と、加賀美が驚き、俺と風間はライダーに変身する。

「さっきの怨み、晴らせて貰います。」

と、影山に言うドレイク。

「どうでも良いが、何故カブトが二人いるんだ！？」

と、影山は突っ込みつつザビーに変身する。

ドレイクは、

「cast off」

と、電子音を発してアーマーを弾き、

「change, dragonfly(チェンジ、ドラゴンフライ)」

と、ライダーフォームに移行。

「キャストオフ！」

ザビーはゼクターをいじり、

「cast off」

と、電子音を鳴らしてアーマーを弾き、

「chagge, wasp」

と、ライダーフォームに移行。

それと同時に、俺もキャストオフをし、

「change, beetle」

と、電子音を鳴らしてライダーフォームに移行。

俺、ドレイク、ザビーの3体は、

「clock up」

と、電子音を鳴らしてクロックアップをする。

ザビーはドレイクを相手に襲い掛かる。

だが、俺がドレイクを守り、ドレイクがザビーに攻撃。

それに続き、俺も攻撃をしようと、ザビーに近付く。

が、そこへウカワームが乱入して来て、

「天道 総司。」

お前の相手は私だ。」

と、いきなり攻撃。

そして気が付くと、クロックアップが解除されており、俺はウカワームの下敷きにされていた。

「天道！？」

と、ガタツク。

「俺は平気だ。」

お前はもう一人の俺と一緒に雑魚と戦ってる。」

俺はガタツクにそう言い、起きあがろうとした。

しかし、ウカワームが体重を掛けており、思う様に動けない。

「どうした天道？」

と、ウカワーム。

「お前・・・工場で消滅したんじゃないのか!？」

「あれは私では無い。手下のジェノミアスワームだ。」

「成る程、通りでこの間より早い訳だ。」

そう言い、俺はハイパーゼクターを呼ぶ。

ハイパーゼクターはその思いに答える様に飛来し、サイドバックルに自動的に装着。

「ハイパーキャストオフ。」

俺はハイパーゼクターの角を90°倒し、

「hyper cast off」

の電子音と共にハイパーフォームに変形し、

「charge hyper beetle」

と、移行完了。

「少しはマシになったか。」

と、ウカワーム。

俺は乗っかっているウカワームを持ち上げて放り投げた。

「私を放り投げるとはな。褒めてやろう。」

そう言い、ウカワームは接近して攻撃して来た。

しかし、俺が受けるダメージは殆ど無かった。

ドカーン!

爆音が鳴り、爆風と共にザビーがより吹っ飛び、ザビーの変身が解けた。

「役立たずが!」

と、ウカワーム。

「よそ見をするな。」

と言いながら、俺はよそ見をしているウカワームの腹に一発パンチを入れる。

「うがつ!」

と、体勢を崩して痛がるウカワーム。

「どうした。さっきまでの威勢は？」

俺はそう言い、今度は腹に蹴りを入れる。

「うっ！」

と、再び体勢を崩して痛がるウカワーム。

ウカワームは体勢を立て直し、

「ライダーがこんなに強い筈が無い！」

と、怒り狂って猛攻撃をして来た。

「そんなものか。」

俺は惨めなウカワームに言う。

ウカワームは、クロックアップをしながらラッシュ攻撃をした。

「ぐはっ！」

クロックアップによって攻撃の威力が増したらしい。

俺はウカワームの地獄の様な猛烈なラッシュ攻撃を浴びて身動きが取れなかった。

「ぐっ……がはっ！」

ウカワームの攻撃が納まり、

「ば……馬鹿な……。」

と、言いながら、遂に俺はその場に倒れてしまった。

そして、俺の変身が解け、カプトゼクターとハイパーゼクターが同時に飛び去る。

「はぁ……はぁ……はぁ……。」

俺の息は切れていた。

ウカワームは再び、俺の上に乗った。

俺はあまりの痛みに耐えきれず、

「ぐわーっ！」

と、悲鳴をあげてしまった。

「天道！？」

と、ガタツクはクロックアップして近付くが、ウカワームに弾き飛ばされ、背中を地面に打ち付け、変身が解けてしまった。

また、ドレイクもクロックアップして近付いたが、加賀美と同じ運命を辿った。

残るは一人。

もう一人の俺が変身したカブト……。

だが、そのカブトもウカワームにやられ、爆発して消滅してしまった。

「貴様！」

俺は起きあがろうとしたが、ウカワームが腹を踏みつぶして来た。

「がはっ！」

俺は口から血を吐く。

それから数分が経つと、俺は目の前が真っ白になって気絶していた。

天道死す（後書き）

死ぬな天道ワーム！

地球を救えるのはお前だけだ！

目を覚ませ天道ワーム！

所で、未来天道は死んだのか？

仲間

目が覚めると、俺は本来の姿でZECTの総本部の実験室の培養液に浸されていた。

目の前には三島 正人がいる。

「目が覚めたか。」

と、目の前の三島が言う。

「此処から出せ！」

と、俺は言う。

だが三島は、

「これからお前を改良する。」

と言って、出してはくれなかった。

「改良だと!？」

「そうだ。」

これからお前に我々が作ったプログラムをインプットする。」

「インプット・・・だと？」

何をインプットするつもりだ!？」

「オートパイロットシステム。」

与えられた任務を必ず遂行するプログラムだ。」

「そんな事をして無駄だ!」

「カプトゼクターとダークカプトゼクターの融合。作戦の第一段階は既に完了している。」

もつとも、適正試験にしかすぎないがな。」

と、三島はほくそ笑みながら言い、コンピュータの前に移動して操作した。

それと同時に、俺の頭に何かが入り込んできた。

それが何らかのウイルスだと言う事は直ぐに解った。

一通りの操作を終えると、三島は俺の前に戻って来た。

「気分はどうだ?」

と、三島。

「最高だ。」

俺はそう言いたかったのでそう答えた。
何故答えたかったのかは分からない。ただたんに答えたかっただけなのだ。

三島は、

「そうか。」

と言つて、培養液を抜いた。

ポコポコポコ

と、液体が抜ける音がする。

その後、ケースのフタが開いて解放される。

そこへ麗奈がやって来て、

「終わったか？」

と、三島に聞く。

「たつた今終わった所だ。」

と、三島。

「そうか。ならば試してみよう。

ビートルワーム、付いてこい。」

と、俺に命令する麗奈。

俺は命令に従い、麗奈に付いて行く。

麗奈と俺は、ZECT総本部を後にし、ワームの巣となっている廃工場へと向かった。

「此処で少し待っている。」

と、言い残した麗奈は奥の方へと向かった。

それから直ぐ、麗奈が数体のサナギ体を連れて戻ってきた。

「今日からこいつ等はお前の手下だ。

好きに使って構わん。」

麗奈は俺に言った。

「俺の・・・手下ですか？」

「そうだ。」

「ではお言葉に甘えて。」

そう言つて、俺はサナギ体共も引き取る。

「早速、お前に任務を与えよう。」

加賀美 新を殺して来い。」

俺は天道に擬態し、

「お任せ下さい。」

と、言つた。

俺は早速、数体のサナギを連れ、加賀美に接触した。

「天道、その数体のサナギ体は何だ？」

と、俺の後にいる数体のサナギ体を見て加賀美が聞く？

ふっ、間抜け目。

「加賀美、悪いがお前には死んで貰う。」

そう言つと、俺は本来の姿に戻る。

「ど、どういう事だよ・・・天道？」

「こういう事だ！」

俺は加賀美に襲い掛かる。

だが、ガタツクゼクターが飛来し、俺を怯ませる。

「お前とはいつかこうなると思つてた・・・」

それが、今日だったとはな！」

加賀美はゼクターを掴み、

「変身！」

と、ベルトにセットしてガタツクに変身した。

すると、一匹のサナギ体が自滅しに、前へ出た。

「馬鹿野郎！戻れ！」

俺はそう言つたが、時既に遅し。

ガタツクバルカンの弾丸によって爆裂霧散してしまつていた。

「次はどいつだ！？」

と、ガタツクはやる気満々で言つた。

仕方があるまい・・・俺がやるか。

俺は、天道に擬態し、カブトゼクターを呼ぶ。

カブトゼクターは飛来し、自動的にベルトへ合体。

「HENSHIN!」

と、電子音が鳴り、カブト・マスクドフォームに俺は変身した。

「今度はお前か!」

と、ガタツク。

「キャストオフ!」

ガタツクはゼクターに手を掛けると、ゼクターホーンを180°展開。

「cast off」

と、アーマーが吹っ飛び、

「change stag beetle」

と、ライダーフォームに移行した。

手下のサナギ体は全員で脱皮をし、ジェノミアスワームになった。

ジェノミアスワーム達は、クロックアップすると、ガタツクに立ち向かって行った。

それを見ていた俺は、

「キャストオフ。」

と、ゼクターホーンを180°展開。

「cast off」

と、アーマーが吹っ飛び、

「change beetle」

と、ライダーフォームに移行。

「クロックアップ。」

サイドバックルのボタンを押し、

「clock up」

と、電子音を発してクロックアップする。

俺はカブトクナイガンを出すと、ジェノミアスワーム達にタコ殴りにされてるガタツクを斬りつける。

シャキーン!

ガタツクの胸部に傷が出来る。

ガタツクは抵抗しようとしたが、ジェノミアスワーム達にタコ殴りにされてるので、抵抗が出来ない。

俺はクナイガンをしまうと、

「one-two-three」

と、フルスロットルを順番に押した。

カシャ！

と、ゼクターホーンを180°展開し、パワーをチャージ。

「ライダー、キック。」

カシャ！

と、再び展開。

「rider kick」

と、電子音が鳴る。

「どけお前達。」

俺はガタツクに近付きながらジェノミアスワーム達に命令。

ジェノミアスワーム達はガタツクから離れる。

「終わりだ。」

そう言い、俺はガタツクに回し蹴りを放った。

ドッカン！

と、爆発が起き、ガタツクは吹き飛ばされ、地面に背中を打ち付けると、ゼクターが飛び去って変身が解けた。

「clock over」

と、クロックアップが解除される。

その後、俺はカブトクナイガン・ガンモードを出し、加賀美の前まで行つて構えた。

「やめろよ天道……。」

俺達、仲間だろ？」

と、怯えながら言う加賀美。

「仲間？」

何の事かさっぱりだな。」

「天道！俺の事忘れちゃったのかよ！？」

「忘れてなんかいない。」

お前は俺の宿敵。倒さねばならない存在だ。」

「やっぱり忘れちまったんだな……。」

思い出してくれ！俺達の日々を！」

加賀美は必死に訴えかける。

何度も、何度も。

「黙れ加賀美。」

俺はそう言いながらトリガーに指を掛けた。
その時。

「rider shooting」
ライダーシューティング

と、電子音が聞こえ、一発のエネルギー弾が俺を目掛けて飛んできた。

俺はエネルギー弾が当たる寸前に、

「clock up」

と、電子音を鳴らしてクロックアップし、エネルギー弾を避けた。

「clock over」

俺は自らクロックオーバーする。

「避けたか。」

と、ドレイクが顔を出して言った。

「影山と言う奴から話は聞いた。」

ワームにね……ね……。」

「俺が寝返ったとでも言いたいのか？」

「そうそう！それそれ！」

「残念だが、俺は最初からお前達の敵だ。」

「何だと？」

「出会った当初から敵だと言っているんだ。」

「お前、それ本気で言ってるのか？」

「何が言いたい？」

「今までお前は、俺や他のライダーと、ワームを倒してきただろ。
それなのに……それなのに……。」

「敵側に寝返って人々を襲う。」

「そうそう！それぞれ！」

「俺は人間を襲う為にZECTに作られたワーム型アンドロイドだ。人を襲って何が悪い？」

「ZECTに作られた！？」

地球征服の為にか！？」

加賀美は驚いて聞く。

「^{ゴミ}黙れ人間が！」

俺は加賀美にカブトクナイガンを構える。

「ライダーシューティング！」

ドレイクは加賀美を守る為、再びエネルギー弾を発砲。

俺はゼクターホーンを180°展開。

「put on」

と、電子音を鳴らしてマスクドフォームに戻り、完全に防御した。

「俺とやると言うのか。」

「やむをえない。」

そう言い、ドレイクは攻撃をしてきた。

カーン！

ヒビイロノカネの装甲が身を護。

「クロックアップ。」

ドレイクはクロックアップした。

「見えてるぞ！」

俺はカブトクナイガンを構え、狙って撃った。

光弾はドレイクにクリティカルヒットし、ドレイクを怯ませる。

「clock over」

と、ドレイクのクロックアップが解除される。

俺はその隙に、アバランチシュートを発動。

ドレイクはビームをモロに喰らい、変身が解けてしまった。

「今楽にしてやるよ。」

俺は風間にカブトクナイガンを構え、トリガーに指を掛けた。

「天道……。」

加賀美が起き上がり、俺に小型銃を向けた。

「小さいが、威力はあるぞ！」

加賀美は引金を引いた。

パン！

と、銃弾が発射された。

カーン！

銃弾は跳ね返り、加賀美に直撃。

「うわっ！」

と、倒れる加賀美。

幸い、心臓は免れたが、重傷を負ってしまった。

俺はそんな惨めな加賀美に言った。

「無闇に銃を撃つからだ。」

と。

さて、どいつからトドメを刺すかな……。

俺は風間に銃口を向けながら考えていた。

その時、俺の隣に麗奈がいきなり現れた。

「邪魔者は私が始末する。」

お前は加賀美にトドメを刺せ。」

麗奈はそう言うと、ウカワームに姿を変え、生身の風間に遅い掛かった。

ウカワームに風間を任せた俺は加賀美に銃口を向ける。

「俺を……殺す……気か？」

と、加賀美。

「麗奈様の命令は絶対だ。何が何でも遂行する。」

そう言い、俺は引き金を引いてアバランチシュートを撃つ。

しかし、ガタツクゼクターが飛来し、ビームを受け止める。

「瀕死の資格者をも守ろうとするか。よほど死なれては困る資格者の様だな。」

と、ゼクターに言っても通じないだろうが、一応、言う俺。

「だが、ベルトを外したらどうなる？」

俺はそう言い、ガタツクゼクターを吹っ飛ばし、加賀美のベルトに触れた。

その瞬間、体中にビリビリと電気が流れた。

「ぐっ……なっ……何が起こつてる!？」

俺は変身が解け、その場にしゃがみ込んでしまった。

ウカワームは、風間を気絶させると、俺の下へやってきた。

「どうした？」

ウカワームは聞く。

だが、俺は答えなかった。

「System error・function stop・」
システムエラー。機能停止。」

と、突然の音声。

それから数十秒後、

「Urgent system start・(緊急システム作動)」

と、音声が出て予備システムが作動する。

そして、俺が最初に見たのは、瀕死状態の加賀美だった。

俺は辺りを見回し、麗奈の存在を確認。

「お前か……お前が加賀美を!？」

と、麗奈を睨み付けてぶん殴った。

「どういっつもりだ天道？」

と、麗奈は聞く。

「お前を倒すつもりだ。」

そう言い、俺はカブトゼクターを呼ぶ。

飛来したゼクターは、自動的にベルトにセットされた。

俺はそれと同時に、

「変身。」

のかけ声。

「HENSHIN!」

と、電子音が鳴り、カブト・マスクドフォームに変身した。
同時に、麗奈もウカワームになる。

「キャストオフ。」

俺はゼクターホーンを展開。

「cast off」

と、ウカワームに向かってアーマーが2000m/sで飛んで行く。
ウカワームはアーマーが当たって怯んだ。

「change beetle」

と、ライダーフォームに移行。

「裏切り者目！」

と、ウカワームはクロックアップで近付いてきた。

「クロックアップ。」

俺はバツクルのボタンを押し、

「clock up」

と、電子音を鳴らしてクロックアップする。

その直後、俺は襲い来るウカワームを迎え撃つ。

だが、ウカワームは素早く避け、背後に回り、そのまま蹴り飛ばして来た。

俺は蹴り飛ばされて数メートルほど吹っ飛んだ。

更に、ウカワームは追い打ちを掛ける様にして近付き、連続攻撃を繰り返す。

「clock over」

と、クロックアップが解除される。

「天道・・・私を倒すのでは無かったのか？」

と、ウカワームは大きなハサミで挟み込む。

「ぐっ・・・。」

俺は身動きが取れなかった。

「くっ、ハイパーフォームにさえなれば・・・。」

と、俺は呟く。

「ならばそのハイパーフォームとやらになっただろうだ？」

と、ウカワームは挑発すると俺を解放する。

俺はハイパーゼクターを呼んだ。

飛来したハイパーゼクターは、バツクルに自動的に装着された。

「ハイパー、キャストオフ。」

と、ゼクターの角を倒す。

「hyper cast off」

俺は光に包まれ、ハイパーフォームに変形し、

「change hyper beetle」

と、ハイパーフォームに移行完了。

「ハイパークロックアップ。」

俺はハイパーゼクターのボタンを押し、

「hyper clock up」

と、電子音を鳴らしてハイパークロックアップをした。

その瞬間、総ての時間の流れが止まったかの様に遅くなった。

だが、ウカワームは普通に動いていた。

奴もまた、ハイパークロックアップをしたのだ。

両者は、互いに近付き、ラッシュとガードを長時間にあたって繰り返す。

大体、1時間くらいだろうか。

勿論、ハイパークロックアップをしている側から見ただ。

通常時間では5秒間しか経っていない。

「そろそろ諦めたらどうだ？」

へロへロのウカワームは言った。

「まだだ。」

俺はそう言い、ウカワームの腹に強力なパンチを入れる。

「うがつ！」

ウカワームは怯んだ。

「そろそろトドメを刺させて貰う。」

そう言い、俺はゼクターに手を掛ける。

「one」

と、フルスロットルを押し、

「two」

と、二回目。

俺は三つ目を押す前に、

「何か言い残す事は無いか？」

と、聞いた。

ウカワームは、

「心を入れかえる。見逃してくれ。」

と、命ごいをした。

「信用出来るか。」

俺はそう言い残し、

「three」

と、三つ目のボタンを押した。

カシャ！

と、俺はゼクターホーンを展開。

「ライダー、キック。」

俺はそう言い、再びゼクターホーンを展開した。

「rider kick」

と、電子音が発声し、俺はそれと共に回し蹴りをした。

ドカーン！

と、ウカワームはライダーキックを喰らい、本当に爆裂霧散した。

その時のウカワームは、微笑んでいるかの様に見えた。

俺はジェノミアスワーム達の方を振り向き、

「残りはお前達だな。」

と、呟いた。

ジェノミアスワーム達は、

「何でも言うことを聞きますからそれだけは！？」

と、一斉に土下座をした。

それほどまで行きていたいのか？

「好きな所へ行け。」

と、俺は彼等に言った。

彼等の内の一匹は、

「ならばあなた様に付いて行きます!」

と、発言した。

それは他の奴らも同じである。

断るつもりは無い。

「良いだろう。」

俺は彼等に言った。

彼等は喜んではいだ。

仲間（後書き）

敵を欺くには、先ずは味方から。

昔からある諺ですが、天道ワームからはそれが感じられない。
本気で殺す気だったのか？

陰謀

7年前、突如渋谷に巨大隕石が落下し、渋谷は崩壊された。

そこで俺・・・いや、天道 総司は、瓦礫に埋もれている少女を発見する。

「助けて・・・。」

少女は助けを求めている。

天道は、少女へ駆け寄り、少女に手を差し出す。

少女は、天道に手を伸ばした。

しかし、少女に瓦礫が振って、少女は完全に埋もれてしまった。

「どうかしたの？」

と、加賀美が突然聞いた。

「7年前の事をちよつとな。」

「ふーん。」

と、加賀美は鼻を鳴らした。

「そんな事よりサバ味噌はまだか？」

俺は客として来ているんだ。」

と、腕を組みながら言う俺。

「アンドロイドって食べるの？」

「人間に擬態すると、外見だけではなく、内側も人間になるからな。食べなければ死ぬ。」

「死ぬの？アンドロイドでも？」

「もう良い。」

帰る。」

俺はそう言い残し、サルを去る。

これ以上加賀美と話をしていたら頭が変になりそうだ。

そう思いながら、行く当ても無く彷徨っていると、一匹のスコルピオワームとマラソン・・・いや、襲い来るスコルピオワームから逃げているひよりと鉢合わせした。

「天道、お前も早く逃げた方が良いぞ。」

と、ひよりは言った。

「俺は逃げも隠れもしない。」

俺はひよりに言っただつもりだが、ひよりはそのままスルーして行った。

「聞けよ！」

俺は鬱憤晴らしにスコルピオワームに足払いを掛けた。

ひよりを追いかけていたスコルピオワームは足を引っかけてすっ転んだ。

「お前の相手は俺だ。」

俺がそう言つと、スコルピオワームは立ち上がって殴りかかって来た。

だが、俺はヒョイと避ける。

何だコイツ。

クロックアップしないのか？

動きが単純だな。

これなら変身しなくても勝てるか？

そう思つて油断していると、スコルピオワームはクロックアップをし、アックスボンバーを繰り出した。

俺はそのまま地面に叩き付けられた。

どうやら俺ははめられたらしい。

変身しなければ恐らく勝てないだろう。

そう判断した俺は、カプトゼクターを呼び、カプト・マスクドフォームに変身し、直ぐにキャストオフした。

「change beetle」

と、音声を發してライダーフォームへ移行完了。

色々と面倒だからな。

数秒で片づけるか。

「クロックアップ。」

俺はボタンを押し、

「clock up」

と、音声を発してクロックアップをする。

それと同時に、全ての時間の流れが遅くなり、偶々目の前を横切ろうとした蠅の動きがゆっくりになった。

俺は邪魔な蠅をどかし、スコルピオワームに接近し、ラッシュを掛け、怯んだ隙にライダーキックを発動させ、

「rider kick」

の音声と共に回し蹴りを放った。

所が、俺の必殺技はスコルピオワームには当たらなかった。

奴が避けたからである。

「clock over」

と、強制クロックオーバー。

「よ、避けただと!？」

俺は思わず声にした。

仕方がない、ハイパーフォームで片を付けるか。

俺はハイパーゼクターを呼ぶと、ハイパーゼクターが俺の下へ飛んできた。

俺はソイツを掴む・・・いや、掴もうとしたが、ハイパーゼクターは俺を避け、Uターンをするかの様に方向を変えて飛んでいった。

俺がそれを目で追うと、カブトが立っており、カブトがそれを掴んで腰にセツトした。

えっ、カブト!？

そんな事ってあり得るのか？

俺は我が目を疑った。

だが、俺の目は普通だった。

「カブトが・・・二体・・・」

俺はそう呟いた・・・。

カブトは近づきながら、

「ライダーシステムは回収させてもらっ。」

と、言った。

ZECTか。

「ZECTだな？」

俺は聞いた。

だが、相手は問答無用で攻撃をして来た。

「くっ！」

俺はカブトのパンチを受ける。

ドン！

続けてキックが入った。

一瞬、俺は蹠跟めいたが、直ぐに体勢を立て直した。

「しぶとい奴目……」

これならどうか？」

カブトは、腰に装着してあるハイパーゼクターの角を倒し、ハイパーキヤストオフをしてハイパーフォームになった。

こうなってしまうては、俺に勝ち目は無い……いや、まだ策はある。

俺は未来から来て麗奈の一撃で消滅した天道から無理矢理頂いたハイパーゼクターを呼ぶ為に左手を天にかざした。

その間に、カブトはハイパークロックアップをして、俺の視界から消え去っていた。

ドスッ！

背中に重いパンチが当たった。

俺は前に吹っ飛び、そのまま地面に落ちた。

「まだか……」

俺はなかなか来ないハイパーゼクターの事を考えながら囁いた。

その間、俺はボコボコに殴られまくっていた。

「まだ倒れないか！？」

カブトは、更に強烈な連撃をして来る。

「オラオラオラオラオラオラオラ……」

と、カブトは数分間に渡って俺を殴り続ける。

他から見れば、パントマイムをしてる様にしか見えなだろうか・

・。

するとそこへ、

「天道・・・何やってるんだ？」

と、生身の加賀美がやって来て言った。

「邪魔だ！」

カブトはそう言い、加賀美を弾き飛ばす。

「うわぁ！」

加賀美は２メートルほど飛んだ。

加賀美は立ち上がって、

「何かいるの？」

と、呟きガタツクゼクターを呼ぶ。

お、愚かな・・・。

死にに急ぐ様なものだぞ加賀美・・・。

俺は心の中で囁いた。

だが、その囁きは加賀美に届く訳もなく、加賀美はあっさりとガタツクに変身した。

「天道！今助ける！」

そう言つて、加賀美はゼクターホーンを展開し、キャストオフをした。

「change stag beetle」

と、ライダーフォームへ移行するガタツク。

「クロックアップ！」

ガタツクはボタンを押し、

「clock up」

と、電子音を鳴らしてクロックアップをする。

「何者だお前！？」

ガタツクは目にも留まらぬ速さでカブトに体当たりした。

「うわ！」

カブトは吹っ飛ばす。

「気を付ける加賀美！そいつはかなり早い！」

俺はガタツクに忠告をするが、ガタツクは俺の言葉を無視し、目にも留まらぬ速さでカブトに向かって行った。
だが、次の瞬間には、クロックアップが解け、宙を舞うガタツクの姿が見えた。

ガタツクはそのまま地面に落下し、変身が解けてしまった。

「clock over」

カブトのハイパークロックアップが解け、

「put on」

と、マスクドフォームに戻った。

「ちっ！」

と、舌打ちをするカブト。

「clock up」

俺はクロックアップを発動し、カブトの腰に付いているハイパーゼクターを奪い取り、

「clock over」

と、クロックオーバーする。

「こいつは返して貰った。」

俺はカブトに言う。

「何時の間に!？」

と、カブトは驚いた。

「答えて貰おうか。」

「何をだ？」

「お前が何者で、どういう経路でカブトになったのかを。」

そう言っつて、俺はカブトを睨み付けた。表情が見えないのが残念だな。

カブトはゼクターが外れ、変身が解けた。

天童だった……。

「天童……。」

俺は呟いた。

「お前、ワームに殺された筈だが……。」

「本物はな。」

天童はそう言うと、ベルクリケタスワームに変態。

ベルクリケタスワームは、羽を擦り合わせ、発音境から攪音波催眠を発生させた。

すると突然、加賀美が起きあがった。

「やれ。」

ベルクリケタスワームはそう言い残し、その場を去って行った。

「待て！」

「clock up」

俺はクロックアップを発動させ、ベルクリケタスワームを追いかけた。

「しつこい奴目。」

と、ベルクリケタスワーム。

俺はベルクリケタスワームの羽を掴んでぶつちぎった。

「は、羽が!？」

ベルクリケタスワームは、振り向いて攻撃をして来た。

だが、俺は直ぐに避け、腹に強烈なパンチをお見舞いした。

ベルクリケタスワームは腹を押さえた。

俺は隙だらけのベルクリケタスワームの首を腕で軽く絞め、

「俺の質問に答える。」

と、カブトクナイガン・クナイモードの刃をのど元に当てて言った。

「何を答えれば宜しいんですか？」

と、怯えながら泣きそうな声で聞くベルクリケタスワーム。

「ZECTとワームの関係だ。」

「お、俺はただ……。」

「ただ？」

「三島 正人と言う人間に脅されて……。」

「脅された？」

「カブトの抹殺……マスクドライダーシステムの回収に協力せよ。さもなければ貴様を抹殺すると……。」

俺は殺されるのが嫌だった。だからお前に近付いたんだ。」

「お前？」

口の利き方に気を付けたらどうだ？」

俺はカブトクナイガンを喉に軽く刺した。

「ご、御免なさい。」

と、謝るベルクリケタスワーム。

「スコルピオワームにひよりを襲わせたのはお前か？」

「ま、待て！何のことだ！？」

「とぼけるな。」

俺は更に奥へと刺す。

「うつ・・・とぼけてないです。」

あいつはただ・・・本性を現しただけです。」

「本性？」

「神代 剣・・・知っていますね？」

「知っている。」

「彼は、ワームなのですよ。」

「あいつが・・・ワーム？」

「1年前に、ZECTが剣の本物をAREA-Xの地下に閉じこめ、スコルピオワームとすり替えた。」

だが、スコルピオワームは剣の記憶に支配されて・・・。」

「成る程・・・。」

最後にもう一つ、お前がカブトになった経路を話せ。」

「あれは、貴方とウカワームが戦っていた時です。」

一人のライダーが爆発して、それと同時に俺の所へ・・・。」

「あの時の爆風でベルト飛んだのか。」

所で、ZECTはマスクドライバーシステムを回収して何を企んでいる？」

「それだけは、言えません・・・。」

私がZECTに抹殺されてしまいます・・・。」

そう言うベルクリケタスワームに対し、

「言わなきゃ俺がお前を抹殺する。」

と、俺は更に奥まで刺して言った。

「どうせ言っても殺す気なんだろう？」

「それは無い。」

お前には利用価値がある。喋ってくればお前を俺の奴隷として働かせてやる。

悪くない話だろう？」

俺はそう言ったが、

「奴隷は嫌だ。」

と答えるベルクリケタスワーム。

「そうか・・・それは残念だ。」

俺はそう言い、アバランチスラッシュを発動した。

ベルクリケタスワームは、

「ぎゃー！」

と、悲鳴をあげて消滅した。

それと同時に、

「clock over」

と、電子音が鳴ってクロックアップが解除された。

「ZECTは何を考えているんだ・・・。」

俺はそう呟き、変身を解くと、そのまま家路に着いた。

陰謀（後書き）

ZECTは何を企んで・・・。

天道ワームの企み

「ライダーキック！」

と、ガタツクが必殺技を発動し、ワームを倒した。

「clock over」

と、クロックアップが解除される。

全てが終わり、ガタツクが変身を解こうとした時、彼は見た。少し離れた所で、ドレイクが人を襲っているのを。

「何してるんだ！？」

と、ガタツクは大きい声で言った。

ドレイクはそれに気付くと、直ぐにその場を去った。

ガタツクは慌てて襲われた人に近付くが、爆裂霧散してしまった。ガタツクは変身を解き、ビストロ・ラ・サルへ向かった。

「天道！」

と、加賀美が叫ぶ。

「加賀美、五月蠅いぞ。」

「聞いてくれ天道！」

風間が・・・ドレイクが人を殺した！」

「何かの間違いだろ。」

「本当なんだって！」

加賀美は机を叩き、顔を近付けて言った。

「・・・・・・・・。」

どうでも良いが、顔を近付けな。つばが飛ぶ。」

食事中の俺は加賀美にそう言った。

「ごめん。」

加賀美は素直に謝って退いた。

俺は取り敢えず完食すると、

「置いておくぞ。」

と、代金をカウンターに置いてサルを出た。

「待てよ天道！」

と、加賀美も出てくる。

「何処行くんだ天道！？

話はまだ終わってない！」

加賀美が俺を引き留める。

「何だ？」

「俺の話信じないのか？」

「さあな。」

俺はそう言い残し、風間の下へ向かった。

風間の職場に着いた俺はそこへ押し入った。

「お前か。」

今忙しいんだ。後にしてくれ。」

風間は女性客を相手にメイクをしながら言った。

「大介今忙しいんだって。」

暇ならあたしが相手してあげても良いよ？」

と、ゴンが言った。

「ゴン、気持ちは嬉しいが、これは大人の問題なんだ。」

子供が関わってはいけない。」

「ならばそこで待ってる。」

と風間。

「風間流奥義、アルティメットメイクアップ。」

風間は最後の仕上げに掛かり、数分でメイクを完成させた。

「どうですか？」

風間は鏡を女性客に渡した。

鏡を覗くと、女性はにっこりと笑顔になった。

「美しい。素晴らしい出来上がりだ。」

貴方はまさに一つの、一つの、えっと、その・・・。」

風間は言葉につまり、

「美しいバラの花。」

と、ゴンが言う。

「そうそう！それぞれ！」
と、風間。

このやり取りを見てると、男女二人組がコントをやっているかの様だ。

「ありがとうございます！」

と、風間は女性客を見送る。

「で、話って何だ？」

風間は向き直って聞いた。

「どうやら加賀美に見られたらしい。」

「何をだ？」

「お前が・・・ドレイクが人を襲う所をだ。」

「ああ。知っている。」

彼とはいつか戦う事になるかもしれないな。」

そこへ突然、

「ええ？」

大介達、あの人と喧嘩するの？」

と、ゴンが聞き、

「駄目だよ喧嘩しちゃ。」

と、付け足した。

「んっ、そんな事、子供が気にしてはいけない。」

俺はゴンの頭に手を乗せて言った。

「所で天道。」

もし俺達の事がアイツにバレたらどうするつもりだ？」

「その心配はいらない。」

今まで通り奴の前では共にワームを殲滅すれば良い。

だが、万が一バレたならば、問答無用で殺せ。」

「そんな事、絶対に駄目だよ！」

「ゴン。」

お前の気持ちは良く解る。

だが、ワームと人間の共存には無理があるんだ。」

「でも……。」

「ゴン、天道の言う通りだ。」

「……………」

此処で、話の意図が全く掴めないと言う方に特別に説明しよう。

最初に、風間とゴンの本物は、ワームに殺されており、この二人はワームの擬態だ。

次に、地球は既に、ワームに浸食されており、日本だけでは無く、海外にまで被害が及んでいる。

そこで、俺と風間は、少しでも被害を食い止める為、人間との共存を望むワーム以外を片っ端から殲滅して行っただが、結局全て無駄に終わった。

だったらいつそのこと、残り少ない人間をこの世から消し、我々ワームで地球を乗っ取ってしまおうと考えた。

あ？

人間の残りはどのくらいかだと？

地球全体で言うが、ざっと50人くらいしか残っていない。

残りの約65億は全てワームだ。

これは紛れもない事実だ。

この俺様の調べた結果に間違いは無い。

とまあ、そう言う訳だ。

……………」

「解ったよ。」

大介がそこまで言うなら私も協力する。」

ゴンは風間にそう言った。

「ゴン……………」

と、風間。

俺は二人の厚い友情を見て少しほっとした。

二人の意見が対立し、バトルロワイアル（殺し合い）を始めるのは無いかと思っただからだ。

「どうやら反対意見は無い様だな。」

俺はそう言つと、その場を後にした。

外に出た俺は、いきなり何者かに襲われて吹っ飛ばされた。

「clock over」

その音声と共に姿を現したのはガタツクだった。

「全部聞かせて貰ったぞ！」

「加賀美……」

「答える天道！さもなければお前を倒す！」

ガタツクはダブルカリバーを準備して言った。

「お前に言う事など何も無い。」

俺はそう言った。

「ならば力ずくで答えさせてやる！」

ガタツクは軽く飛び上がり、ダブルカリバーを真上から俺を目掛けて振り下ろした。

俺は素早く避け、飛来したカブトゼクターを掴んだ。

「出来る事ならお前とは戦いたくは無い……」

俺はそう言つてゼクターを手放した。

ゼクターはそのまま落下し、ベルトに自動的に装着された。

「変身。」

俺が言つと、

「H E N S H I N !」

の音声と共に瞬時にマスクドアーマーが形成され、カブト・マスクドフォームになった。

その後俺は、

「お婆ちゃんが言っていた。

未熟な果物は酸っぱい。未熟者ほど喧嘩をするってな。」

と、得意の語録を披露した。

「訳解らない事言つてんじゃねえよ！

クロックアップ！」
ガタツクはクロックアップを発動させると、俺の視界から一瞬で消えた。

そして次の瞬間、ダイヤモンドより硬いヒイロノカネのアーマーに傷が付いた。

「clock over」

ガタツクは自らクロックオーバーし、

「天道！何故キャストオフしない！？」

と、聞いてきた。

「言った筈だ。」

俺はお前とは戦うつもりは無いとな。」

「だったら何故変身した！？」

戦うつもりが無いならそのままやられれば良かっただろ！？」

「お前に隙を作るためだ。」

回りを良く見てみる。」

「何？」

回りを確認したガタツクは、

「嘘・・・だろ・・・。」

と、俺とガタツクを囲んでいる数百体の成虫ワームを見て呟いた。

「こいつらは全て俺のしもべだ。」

加賀美、お前はこれから、こいつらの内の一匹の中で生きる事になる。

一匹選べ。」

「俺は、俺は、俺はワームになんかならない！

クロックアップ！」

ガタツクはクロックアップを発動すると、俺の視界から消えたが、数秒後には変身が解け、一匹のワームに捕まっていた。

「糞っ、離せ！」

加賀美はもがくが、成虫ワームは離そうとしない。

「天道、お前は何を考えているんだ！？」

「人間共を始末して地球をワームだけの星にするんだ。
それしか道は残されていない。」

「そんな事して良いと思っっているのか！？」

「平和になつて良いじゃないか。

ワームと人間ユミの戦いも終わるぞ。」

俺はそう言い残し、移動を始めた。

「待てよ天道！」

「お前等、その人間ユミを始末しとけ。」

俺は成虫ワーム達に言つと、その場を後にし、
A R E A - X へ向か
つた。

天道ワームの企み（後書き）

A R E A - X に向かった天道ワーム。
そこに何が！？

7年前の宇宙へ

俺は今、AREA-X内の培養液に浸されたワームがいる所に来ていた。

「何の用だね？」

「あんたがZECTの黒幕か。」

「如何にも、私がZECTの総監だ。」

「お前の望み通りに人間どもを全てワームにしてやった。」

「ほお。それは、感謝しなくてはな。」

総監はコンピュータの前に移動すると、カタカチャといじり始めた。
「何をしている？」

「この星に新たな仲間を呼び込もうとしているのだよ。」

「仲間？」

「そう。そのためには、ライダーフォームになる必要がある。」

「俺にキャストオフしろと？」

「ご名答！」

やれやれ・・・。

俺はゼクターに手を掛けた。

「待て。培養液の入ったケースと私には当てるな。」

「キャストオフ。」

カシャッ！

「cast off」

アーマーが吹っ飛び、

「change beetle」

と、ライダーフォームに移行。

「上にモニターがある。」

これで外の様子が確認出来る。」

そう言っつて、総監は再びコンピュータをいじった。
すると、モニターに外の映像が映った。

「この映像は？」

「この研究所を中心に周辺をジョウントを使って映し出している。」
「そう言いながら、総監は十数本のコードを取りだした。」

「これを君の身体に取り付ける。」

「どうするつもりだ？」

「まあ見ておれ。」

総監は、俺を覆うアーマーに十数本のコードを繋いだ。

そのコードは、俺の身体からコンピュータに直接繋がっている。

総監はコンピュータをいじり、アプリケーションを起動させた。

「クロックアップを発動させたまえ。」

「クロックアップをか？」

何のために？」

「決まっておろう。」

宇宙空間に巨大なクロックアップ空間を作るためだ。」

「それでどうするつもりだ？」

「ワームの卵付き隕石を呼び出す。」

「成る程、そう言う・・・。」

ふっ、この理論なら歴史を変えられるかもな。

「良いだろう。」

俺はサイドバックルに触れた。

「クロックアップ。」

俺はボタンを押し、クロックアップを発動させた。

しかし、いつもの電子音は鳴らなかった。

「成功だ。」

総監はそう言い、

「モニターを見たまえ。」

と付け足した。

モニターを見ると、宇宙空間が映し出されていた。

それを暫く見ていると、いきなり白い光弾が地球から飛び出し、宇宙空間に巨大な時間軸の狭間を作り出した。

その空間から、7年前の渋谷隕石を超える巨大な隕石が姿を現した。
「あんなものが地球に衝突したら、地球は粉々になるぞ!」

「ならばどうする？」

破壊するか？

まあ、破壊した所で地球は救われないがな。

因みに、あの隕石は7年前の渋谷隕石より小さい。」

「馬鹿な!？」

そんな事が!？」

「7年前、宇宙空間で巨大な隕石同士が衝突して爆発した。

その時の破片が地球に飛来・・・それが7年前の渋谷隕石だ。」

「成る程、そう言う事か。」

全てを悟った俺は、ハイパーゼクターを召喚した。

「どうするつもりだ？」

と総監。

「7年前をひっくり返す。」

そう言うて俺は飛来したゼクターを掴んでベルトに取り付けた。

「ハイパーキャストオフ。」

と、ゼクターの角を倒す。

「Hyper cast off」

俺は光に包まれ、ライダーフォームからハイパーフォームになった。

「change hyper beetle」

と、電子音が鳴る。

俺は身体に繋がったコードを外し、高く飛び上がって天井を突き破り、屋外へ飛び出した。

「ハイパークロックアップ。」

と、ゼクターのボタンを押した。

「Hyper clock up」

電子音が鳴り、カブテクター、左右の腕、左右の足の各パーツが展開した。

直後、時間の流れが全て遅くなり、ジェット噴射を起こして猛スピ

ードで宇宙空間へ飛び出した。

「俺は、天の道を往き、総てを司る男だ！」

俺はそう叫び、地球に近付いてくる巨大隕石をジェットの力で押し返した。

「このまま7年前に吹っ飛ばしてやる！」

俺はジェットの力を最大にし、隕石もろとも時間軸の狭間へ入り込んで行った。

その瞬間、時間流が7年前に逆行した。

「此処が・・・7年前・・・」

俺が呟くと、持ってきた隕石より一回り大きい隕石が真横をゆっくりと地球に向かって通り過ぎて行った。

「あのままでは地球に隕石が!？」

俺は持ってきた隕石の反対側に回り、

「隕石よ・・・消えて無くなれええっ！」

と、叫びながら、持ってきた隕石を、地球に向かって飛んでいく隕石に押し出した。

いや、押しだそうとした。

だが、そこへ一体のコーカサスオオカブトをモチーフにした金色のライダーが現れ、

「させるか！」

と、未来から持ってきた隕石を太陽に向かって蹴り飛ばした。

隕石は猛スピードで飛んでいき、太陽に吸い込まれて消滅してしまっただ。

「通常時間で5分以内にあの隕石をどうにかしないと地球は消滅する。」

と、金のライダーは言った。

「貴様・・・何者だ？」

「俺は・・・コーカサスワーム・・・」

またの名を、マスクドライダーコーカサス。」

おまけ：NGシーン

「お前が神代 総司か。」

と、俺は目の前で背を向けている男に声を掛けた。
すると男は、

「そうだが？」

と、言って振り向いた。

その瞬間、男は俺の姿を見て驚いた。

「お、俺が二人！？」

と、男は言う。

俺はニヤリと笑うと、擬態を解いた。

「何だ、ワームか。」

と、男が言った。

「ほお。俺の事を知っているとは。」

「当然だ。」

で、ワームが俺に何の用だ？

まさか、殺すなんて事は考えてないだろうな？」

「ふっ、解ってるじゃねえか。」

俺がそう言つと、

「やめとけやめとけ。」

返り討ちにされるのがオチだ。」

と、目の前の男が言った。

すると、男の下に何かもとが飛んできた。

その何かは、赤色のカブトムシだった。

男は赤いカブトムシを掴むと、それを腰のベルトに装着した。その瞬間、ジヨウントと言う機能でスーツが転送され来て男の身を包み、男はマスクドライダーに変身した。

俺はその姿を見て、

「ほお。カブトか。」

と、呟いた。

「お前は此処で終わりだ。」

カブトはそう言うと、ゼクターに手を掛け、ゼクターホーンを180°展開させた。

「cast off」

と、アーマーが吹き飛び、上半身が現れた・・・。

スタッフ：「カットカット！」

何でライダーフォームを着て無いんですか!？」

7年前の宇宙へ（後書き）

突如現れた黄金の仮面ライダーコーカサス。
彼は一体・・・。

瀕死

黄金のライダー コーカサス。

「貴様、何故隕石を！？」

「歴史を変える為だ。」

7年後、俺達ワームは人類の手によって絶滅の危機に見舞われる。
それを止める為、7年後の未来からやって来た。」

「ほお、お前が来た未来はそうなっているのか。」

だが、こっちは人類が絶滅の危機に瀕している・・・。」

「そんな事、俺の知った事では無い。」

コーカサスはそう言い、いきなり攻撃をして来た。

「当たるかよ！」

俺はコーカサスの攻撃をいとも簡単に避けた。

「勘違いするな！」

今のは避けやすくしてやったんだ！」

コーカサスは怒りながら言う。

だがそれは大嘘である。

避けられた事を認めたくない一心で吐いた嘘だろう。

「ふっ。」

俺は笑った。

「何が可笑しい！？」

「今の発言、大嘘だと言う事がバレバレだ。」

「ふっ、ふざけるなあ！」

コーカサスは怒鳴りながら殴りかかって来た。

「遅い！」

俺はあっさりと避けた。

「な、何故だ！？何故なんだあ！？」

コーカサスは叫びながら猛攻撃をして来た。

「遅い・・・遅過ぎる！」

俺はそう言いながら、コーカサスのラッシュを全てかわした。

「こ、こうなつたっら！」

コーカサスはZECTベルトに手を掛けた。

「クロックアップ！」

コーカサスはボタンを押し、

「clock up」

と、電子音を鳴らしてクロックアップをした。

「俺のスピードに付いて来られるか？」

そう言つて、コーカサスは目にも留まらぬ速さで連撃をしてきた。

そして気付いた時には、俺は既にボロボロになっていた。

「そんな・・・馬鹿な・・・。」

「弱いな。」

と、コーカサス。

「お前が迅^{はや}すぎるんだよ！」

俺はそう言つて、コーカサスに蹴りを入れた。

しかし、コーカサスは素早く避け、俺の背後に回り込んだ。

俺は振り向こうとしたが、時既に遅し。

コーカサスの膝蹴^{ひざげ}りが背中にもろに入っていた。

「うわああ！」

と、あまりの痛さに俺は奇声をあげた。

更にコーカサスは、手を組んで上から叩き付けた。

カンッ！

と、金属同士がぶつかる音がし、それと同時に俺は叩かれた方と逆の方向へすっ飛んで行った。

要するに、真下へすっ飛んだと言う事だ。

ヒューン、ズドン！

と、俺は大きな音を立てながら小惑星を破壊し、スピードを緩める事なくそのまますっ飛んで行き、とある惑星の大気圏を突破し、身体は摩擦で瞬時に炎上した。

暑い・・・焼け死ぬ！？

どうする事も出来なかった。

俺はそのまま地面に落下するのを待った。

ズドン！

俺は地面に突っ込み、巨大なクレーターを作った。

「んっ・・・何処だ此処は・・・。」

俺は起きあがりながら呟いた。

「此処は我らワームの星だ。」

と、追いかけてきたコーカサスが言った。

俺は上を向いた。

コーカサスが炎の固まりとなって真上から振って来る。

避ける間もなく、俺の顔面にコーカサスが突っ込んだ。

メキメキッ！

仮面にヒビが入ってしまった。

衝撃はそれだけでは済まなかった。

ズドドドドドドドド

俺は振って来たコーカサスのおかげで穴を掘って地中深くに埋まっ

てしまった。

俺はジェット噴射で一気に初速を得て地上へ飛び出した。

コトン！

俺は地面に足を付ける。

それと同時に、何万という成虫ワームとコーカサスが俺を囲んだ。

「終わりだ・・・。」

コーカサスはそう言い、腹に強烈なパンチを繰り出した。

「がはっ！」

俺は腹を押さえて倒れかかる。

「おっと、まだ死ぬなよ!?」

コーカサスがアップパーカットをすると、俺の身体は宙に舞った。

「次はこいつだ！」

コーカサスは飛び上がり、上から叩き付けた。

「うわ！」

俺は勢い良く落下し、背中を強打した。

その瞬間、数体の成虫ワームが俺の身体を踏みつけて来た。
ドシッ、ドシッ、ドシッ！

と、踏みつける音が連続して鳴る。

俺はもう瀕死状態だった。

瀕死状態の者を此処までやる必要無いだろ・・・。

その時、天道の記憶の一部分が脳裏を過ぎ_りった。

ラストバトル

その時、天道の記憶の一部分が脳裏を過ぎった。

「た・す・け・て・．．．」

瓦礫に埋もれた一人の少女が呟いた。

「待ってる！今助けてやる！」

子供の頃の天道は、少女へ駆け寄り、少女に手を差し出す。

少女は、天道に手を伸ばした。

しかし、少女に瓦礫が振って、少女は完全に埋もれてしまった。

天道は瓦礫をどかさうとしたが、瓦礫はびくともしなかった。

記憶の一部分は此処で終わり、別の記憶が脳裏を過ぎった。

「総司、最後まで諦めては駄目。

自分で出来る事は最後まで成し遂げなさい。」

お婆ちゃん！？

．．．そうだ。

俺にはやらなければいけない事がある。

俺は意識を現実に戻し、踏みつけるワーム共を気合いで吹き飛ばした。

「ま、まだそんな力が残っていたか！？」

「ふっ、悪いけど俺はまだ死ぬ訳にはいかないんでね．．．。

お婆ちゃんが言っていた。

可能な限り最後までやり遂げろ、自分で出来る事を最後まで成し遂げれば自ずと道は開くってな。」

「そんな年寄りの戯言、信じてもどうにもなりやせんわ！」

コーカサスはそう言ってパンチをして来た。

俺はそれを手のひらで受け止めた。

「何！？」

驚くコーカサス。

「終わりだ！」

俺はそう言つて、コーカサスの腹に強烈な蹴りをお見舞いした。その瞬間、コーカサスは腹を押さえて怯んだ。

「one-two-three」

と、俺はフルスロットルを押す。

「や、やめろ！」

コーカサスは腹を押さえながら言つた。

「此処が貴様の墓場だ！」

俺はゼクターホーンを180°展開し、

「ライダー、キック。」

と言いつて再び展開した。

「rider kick」

と電子音が鳴り、それと同時に回し蹴りを放つた。

ドッカーン！

コーカサスは巨大な爆発によつて爆裂霧散し、回りのワーム共も爆発と爆風の影響で消え去つた。

そして、この俺も爆風によつて宇宙空間に投げ出された。

俺は辺りを見回して隕石を探した。

隕石は、地球の直ぐ傍まで迫っていた。

「間に合うか！？」

俺はジェットを噴射させ、隕石目掛けて目にも留まらぬ速さで飛んで行つた。

その時間、0.01秒。

とてもじゃないが、肉眼では捕らえられないスピードだ。

俺はハイパーゼクターの角を倒し、

「maxim rider power」

と、電子音を発して最大パワーを蓄積した。

「お仲間の下へ帰りな。」

俺はそう言い、

「one-two-three」

と、フルスロットルを押し、ゼクターホーンを展開した。

「ライダー、キック。」

俺は再び展開。

「r i d e r k i c k」

の電子音と共に回し蹴りを隕石に放った。

隕石は軌道を変え、ワームの星目掛けて猛スピードで爆走し、ワームの星に直撃した。

その瞬間、ワームの星は爆発を起こして木っ端微塵になった。

だが、破片が残り、その破片が爆風によって猛スピードで地球に飛来。

破片は大気圏を突破、摩擦で燃えながら渋谷に直撃し、渋谷全域を崩壊させた。

俺は直ぐさま渋谷に向かった。

その頃、渋谷では二人の男女が、

「ひよりー！」

と、懸命に名を呼んでいた。

どうやら子供がいなくなっただけらしい。

「誰！？」

女性は気配を感じて後ろを振り向いた。

それに続き、男性も振り向いた。

二人の目の前には、2匹のワームが立っていた。

ワームは二人を殺害し、擬態した。

同時刻、子供の頃の天道は瓦礫に埋もれた少女を助けだそうと、瓦礫をどかさうと頑張っていた。

「う、動け！」

と天道。

その時、天道は危機を察知して後ろへ下がった。

その直後、瓦礫が降って来た。

それを確認した俺は、目にも留まらぬ速さで移動し、少女を瓦礫から救い、更に瓦礫をどかした。

天道は少女に手を差しのべた。

少女は天道の手を掴み、すつくと立ち上がった。

「ひより!？」

突然、男女の声が聞こえた。

俺は声のした方を振り向いた。

そこには、二人の男女が立っていた。

二人は近付きながら、ワームになってひよりに襲い掛かった。

「待て。」

俺は二匹を呼び止め、ライダーキックで吹き飛ばした。

二匹のワームは、爆発して消え去った。

俺は変身を解き、天道にベルトを託した。

「ひよりを、守れ。」

俺はそう言い残すと、その場で消滅した。

天道は、ベルトを持ったまま、ワームが消滅した所へ行った。

そこには、さっきのワームに殺されたと思われる二人の男女が横たわっていた。

天道は静かにそれを見つめる。

それから直ぐ、ひよりがやって来た。

「殺さないで……。」

ひよりは呟いた。

ラストバトル（後書き）

カブトはこれで終わりじゃない。
ストーリーは新たな幕を開ける。

次回、仮面ライダー3rd stage・いきなりライダー集結！？
天の道を往き、総てを司る！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7717a/>

仮面ライダーカブト 2nd stage

2010年10月10日17時03分発行